



FUJIKO

# 鳳の眼

舞の章 首都篇

## ・前置き、主な登場人物

---

### ・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は「警備部暗躍係」、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人、リカは女性だけで構成された大手劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られていた。彼女は死と隣り合わせの日々を送り、葛藤しつつ、あらゆる危機や難事件に立ち向かうという使命を与えられたのであった。

### ・主な登場人物

#### リカ

本作の主人公、大手歌劇団の人気スターを務めて、裏では密偵として犯罪に立ち向かっている。舞台の世界で人気を博してきた彼女は、歌劇団創立百周年記念の年に退団することを決意した。最後の舞台に取り掛かる彼女であったが、その裏で史上最悪の事件が起ころうとしており、巻き込まれることとなる。

#### アスカ

リカの跡を継ぐ次期歌劇団トップスター。現代的な恵まれた体型を武器に舞台を彩る素質が見受けられる。裏稼業ではあらゆる犯罪者を相手に日々立ち向かっている。戦闘スタイルは二丁拳銃で、銃技はリカから教わったようである。

#### ヒロコ

大手歌劇団に所属しており、リカとは同期で表と裏の世界を共に過ごしてきた戦友である。普段は落ち着いた性格だが、時に感情的になることがある。

#### ミナコ

元歌劇団男役スター。退団後、結婚して子を授かり、第二の人生を送っているが、ある事件がきっかけで、同期のリカと再会することとなる。

#### ユカ

元歌劇団男役スター。数年で歌劇団を去り、ミナコと同じく第二の人生を送っている。彼女は、結婚後、表稼業と両立させて、裏稼業も行っている。今回、同期のリカと久々に組み、難事件を担当することとなる。

#### リエ

元歌劇団トップスターの一人。当時、歌劇団の次世代を担う舞台人として注目されていた。退団後は舞台以外に映画、テレビ等、活動の場を広げる。結婚後も裏稼業を継続している。

#### ミユ

歌劇団現役トップスターでリカの一年後輩。外見からクールに見えるが、何事にも熱意をもっ

て取り組むため、関係者やファンはそこに惹きつけられる。都内を中心に密偵活動をしており、窮地に追い込まれたリカを助けようとテロリストとの対決に参戦する。

#### マギー

ハーフの歌劇団スターでリカとは同期である。同班のトップスターのミユの頼れる兄貴分？であり、多くの劇団員仲間からも慕われている。今回、久々にリカと仕事することになり、奮闘する。

#### アヤカ

リカやミユが所属する班で地道に経験を積み、実力が認められ、歌劇団のエキスパートが揃っている班に配属されることとなった。裏稼業では、東京で起こったテロ事件の捜査の際、対策チームを仕切る立場となる。

#### チエ

歌劇団の広告塔として活躍しているトップスター。リカの後に退団することが決まり、彼女もまた残された歌劇団人生を大事にして生きている。多忙の中、東京でテロ事件が起こり、彼女は仲間を引き連れて参戦することになる。

#### トモコ

歌劇員の長であり、歌劇団理事も務めるベテランスター。東京の危機的状況に緊急で駆けつけることとなる。

#### 安藤ユウ

秘密警察の捜査員の一人で、リカのパートナーでもある。彼は、主に情報提供や連絡係で、現場捜査はリカに任せている。長年コンビを組んできたが、突然の海外遠征が決まり、彼はリカの前から姿を消すこととなる。

#### 新沼光博

警視庁公安部の部長を務める。階級は警視監、秘密警察の最高責任者である。

#### 本澤直人

警視庁公安部の課長、階級は警視。今回、上司の新沼に頼まれ、リカにある難事件の指令を出す。

#### 朝居恒彦

大学卒業後、大手製薬会社の研究員として勤務していたが、ある事故がきっかけで退職した。その後、職に就かず引きこもり生活を送っていたが、密かにある計画を企てていた。

#### 城ノ内結城

元海上自衛隊自衛官でコミュニティーサイトを通じて、朝居と知り合うこととなった。あるトラウマで人生がねじ曲がり、朝居と組んで良からぬことを企んでいた。

#### 緋岡浩伸

航空自衛隊のエースパイロットであったが、ある事情で除隊となった。その後、朝居と城ノ内と運命の出会いをして、史上最悪のテロ事件の実行犯の一人となる。朝居たちと違って、落ち着いた性格で一番人間味があるテロのメンバーとされる。

## 序章 終わらない破壊

---

前作、舞の章 水都篇のあらすじ

リカの本業である歌劇団の退団を迎える中、歌劇団本拠地近くの駅で毒物が撒かれる事件が起こる。事件は連続して起こり、被害は拡大していく一方で、ついに警察や秘密警察が動き出す。リカも公演を終えた後、被害を受けた神戸に派遣され、捜査を開始した。テロ主犯に振り回される中、テロ実行犯の一人、朝居を確保して、テロの標的となる場所を突き止めた。

リカたち歌劇団メンバーは、大阪の駅ターミナルに急行することとなり、現場には、テロ主犯の城ノ内が武装集団を引き連れて待ち受けていた。歌劇団とテロリストの死闘の末、テロは阻止されて、リカたちの勝利が確定されようとしたが、突如、新手のヘリ部隊が現れ、城ノ内を逃がすこととなった。こうして、テロの脅威は消えず、決戦の地は首都東京に移ろうとしていた。

東京

一月某日、寒空にまばゆい朝日が射し込み、新たな一日が始まろうとしていた。

都内にある緑が続く公園。そこでは小鳥のさえずりが聴こえ、いつも通り静寂で平和な朝を迎えていた。ゆっくり犬と散歩をする年配者が居れば、週間後に行われるマラソン大会に備えて、軽くランニングしている男性グループなどが居た。特に問題なく時間が流れているように思われたが、今朝はどうも様子が違っていた。

公園に設置してあるベンチの下には紙袋のような物があった。その時間、人通りが少なく、気に留める者はいないと思われたが、一人の清掃員が気づき、謎の紙袋を調べようとしていた。中を覗くと何やらペットボトルのような容器がついた装置が入っていた。清掃員はそれが何か分からず、至る場所をべたべたと触った。

「...？」

すると謎の装置に異変が起こり、容器に入った液体がぶくぶくと沸騰し始め、やがて気化してガスが発生した。

「...わ...わわ！何だこれは？」

清掃員はパニックを起こして、謎の装置を置いてその場から去ろうとしていた。しかし、発生したガスは一瞬で広範囲を覆い、公園にいる市民は気分が悪くなり、バタバタと倒れ込んだ。公園は危険区域と化し、付近は大騒ぎとなった。

東京 警視庁 公安部部長室

突如、公園で起きた不審な事件で通報が入り、警視庁もすぐさま対応に追われ、捜査を始めていた。公安部の部長、新沼はさっそく職員を集めて確認を取ろうとしていた。

「...現在状況はどうなっている？」

「...事件現場の公園は完全封鎖して、鑑識および科学捜査班を派遣させ、調べさせています...被害を受けた市民は、毒性のあるガスを吸ったようで、現在意識不明の重体です...」

新沼は、目頭を押さえながら報告を聴いていた。

「.....毒ガスを発生させる装置は何処にあった？」

「...公園のベンチ、死角になる座席の下にありました...装置は紙袋の中に入れていたようで...五ヶ所にありました...」

「...ガスの成分は分かったのか？」

「...分析中ですが、装置の構造が、先日関西で使用された装置と類似しているため、恐らく成分も同じものかと思われます...」

「.....やはりそうか、未然に阻止することは叶わなかったわけだ...！」

新沼は溜め息をつき、悔しさをにじませて相棒の本澤と目が合った。

「...公園には防犯カメラが仕掛けられたため、装置を仕掛けた不審人物を照合しています...じき結果が出るはずです...」

「...分かった、いい報告を待っている...もう下がっていいぞ...」

新沼は職員を退室させて、課長の本澤と二人で会話しようとした。

「...彼らの仕業です...また先を越されましたね」

「...ああ、してやられた...戦力は底なしみたいだな...本腰を入れて攻めるようだ...」

「主犯の朝居は黙秘を続けたままです...ボスを押さえても兵は好きに暴れまわっている...時代も変わりましたね...」

「...彼は主犯ではないぞ、きっかけを作ったにすぎない...危険因子は他にいる...城ノ内結城、元

自衛官の女...彼女を止めなければ...」

「...しかし、彼女はうちの部下との戦闘でかなりのダメージを受けているはず...思ったより早く動いたので驚いています...」

「...油断は禁物だ、まだ組織に有能な人材がいるかもしれない...こちらも作戦を立て直さないと...」

「...また対策チームを編成しますか...?」

「...そうだな、即急に頼む...集まりそうか?」

「...どうでしょうか?まだ新年を迎えたばかりのため、スケジュールの都合で以前の様な人材が集まるとは限りません...」

「...では一新するしかないな、ただ彼女だけは派遣してほしい...」

「!.....リカのことでしょうか?」

「...ああ、今大事な時だというのは分かるが、こっちの件も重要だ...彼女は標的のことをよく知っている...ぜひ引っ張ってきてほしい...」

「...分かりました、それでは対策チームが決まり次第、作戦に移らせます...!」

「...よろしく頼む...」

朝に起きたバイオテロ事件により、公安部も捜査に乗り出そうとしていた。事件後、雪がちらつき、それは、寒さ厳しい冬と共にこれから起こる災難を予兆しているかのようであった。

## 第一話 再戦の序曲

---

東京 有楽町

リカは最後となる歌劇団公演に全力を注いでおり、朝に起きたテロ事件を知るのは先のことであった。その日、一回公演で、無事公演を終えたりカは、ほっとした表情で楽屋の方へと戻って行った。ところが楽屋の扉を開けようとした途端、何やら室内に多くの気配を感じたため、彼女はそっと確認しながら入ろうとした。

「...え？」

リカは室内に居る人物たちを見て、驚愕していた。

「...おっ！お疲れさん～」

「...どうしたんですか...皆さん？」

部屋には、リカと縁がある歌劇団スターの四人が座っていた。まず一人目はチエ。二人目はミユ。三人目はユズミ。四人目はサユミ。

「...リカさんの公演観させてもらいました...芝居もショーもとても良かったです、リカさんに合った演目ですね！」

「観てくれたんだ、ありがとう...！」

ミユが椅子から立ち上がり、リカに歩み寄って公園の感想を述べた。

「...本当に残念ですね、これで辞められるなんて...」

サユミが曇った表情でリカに述べた。

「.....もう決めたことだから仕方ないよ、やることは全てやったからもう悔いがないし...」

「...そうや、もう世代交代って奴や、私らが去れば次はあんたらの出番や、後は任せたで...！」

その時、今年退団するリカとチエと目が合ったミユたちは胸に熱いものがこみ上げていき、しんみりとしていた。

「.....皆、忙しいのにわざわざ観に来てくれたんですね、ありがとう.....！」

リガが歌劇団メンバーに感謝の意を述べるが、どうもチエたちの様子がおかしかった。

「...実はな、リカ、楽屋に遊びに来たんやないんや、他に理由があるんや...」

「え？」

チエは、手を組んで声のトーンを落とした。他のメンバーも深刻そうな表情を浮かべた。

「...リカさんは、公演に追われて知らないかと思われませんが、今朝ある事件が起こりました...」

ミユは、専用のタブレット端末を取り出して電子版の新聞を表示させた。記事の内容は、公園で起きたテロ事件であった。

「...これって...！まさか...！！」

リカは記事の写真を目にした途端、先日関西で起きたバイオテロ事件を思い出した。

「...心当たりあるやろ？あんたが担当した事件と関連性があるみたいやで...」

「...現場となった公園付近は、非常線が張られ、酸素マスクをつけた捜査員が派遣されたりと緊迫した雰囲気になっています...」

「...うちらが所属する公安も動き始めた...メンバーを選択しているところや...それで早速私とユズミに声が掛かった...ユズミは病み上がりやから断れって言ったんやけど...」

「私は大丈夫ですよ～！もう暴れたくてしゃあないですわ～！！」

「.....」

チエは、ユズミのテンションに呆れていた。

「.....まあええわ、死なない程度に頑張りや...ミユもそうやろ？」

「...ええ、私を含めて二名呼ばれました...私たちは主に東京が担当なので...」

「...確かに土地に詳しい者が捜査に加わった方が得やろ...事件はまだまだ続くで」

「...私も召集されるんでしょうか？」

「...当たり前や、あんたは今回の件の中心人物なんやから...！」

「...まあそうですね...」

「よくそんな感じで事件に参加出来たな～」

「...瞬時に切り替えが出来るのがリカさんの持ち味ですよ、リカさんがいなかったら大阪はどうなっていたか...」

「...まあそうやけど、今度はそう簡単にはいかへんで...相手は前より慎重でなかなか尻尾を出さへん...」

「...ええ、リカさんも気を付けて下さい、どうも最近、妙な視線を感じます...」

「私たちも狙われているってこと？」

「...それはまだ分からへん、ただ注意を怠るなってことや...」

チエは、リカの胸の部分に人差し指を当て注意を呼び掛けた。

「...わざわざすみません、知らせに来てくれて...」

「...これくらいするの当然のことやろ...！遠く離れても私らの絆は深いはずや」

「...そうですね」

「...さて、そろそろ失礼しようか？」

チエたちは、用件を済ましてリカの楽屋を後にした。リカは、訪ねてきた四人に一礼した後、室内で深く溜め息をついた。

時間は夕刻、帰り支度をしてリカは劇場の表口から出ようとしていた。外にはリカのファンが出待ちで殺到しており、恒例のファンクラブの儀式を行った。彼女はファンに向けてにこやかな

表情を浮かべて手を振り、迎えの車を待っていた。

すると、一台の赤いロードスターが停車した。迎えの車にしては派手な車なのでリカは躊躇して立ち止まった。

「...ファン！」

運転手は、クラクションで車に乗るよう指示し、リカはそれに従った。ロードスターはリカが乗った途端、すぐに発進して劇場を後にした。

「...どうしてあなたが？」

運転手の正体は、ミュであった。リカは冷静な姿勢でミュに話し掛けた。

「.....付き人の方にはちゃんと言ってあるのでご心配なく...リカさん、尾けられていますよ...！」

「...そういえばさっき楽屋でも言ってたね...何者？」

「...不明ですが、恐らく例のテロが関係しているのでは？劇場前にいるファンにも紛れてましたよ...あと後続車一台、黒のBMW...」

ミュの車のバックミラーに尾行車が映り、リカは納得した表情を浮かべた。

「...あなたが私のボディガードに？」

「...ええ、でも命令じゃありません、独自の判断です、うっとうしいですか？」

「いいえ、ごつい男より心強いわ、何かお礼しないとね...」

「.....おかまいなく...と言いたいところですが一つお願いがあるんですが...いいですか？」

「...遠慮せず言ってみてよ」

「...リカさん、服はどこで買ってるんですか？」

「...またその質問？確か前に内緒って言ったはずだけど...」

「...諦めきれません、リカさんが行きそうな店、だいたい探したんですが、何処も外れで...そろそろ教えてくださいよ〜！」

ミュは、ハンドルを握りながらリカに甘えて情報を聞きだそうとした。

「...もう仕方ないな〜じゃあ...」

「...じゃあ？」

「...後ろの車を撒いたら教えてあげるわ」

ミュは、リカから情報を得るため、すぐさま条件を実行しようとした。

「...リカさん、飛ばしますよ、舌嚙まないで下さいよ！」

ミュはそう言って、ギアチェンジをしてアクセルを深く踏み込んだ。尾行車は異変に気づき、スピードを上げ始めた。その時間、渋滞していないのが幸いして、ミュは自慢のドライブテクニックを披露して尾行車から引き離れた。前方には信号があり、あと数秒ほどで青から赤に変わろうとしていた。ミュが運転する車は、ぎりぎり間に合って走り抜けた。尾行車は追いつくことが出来ず、追跡は失敗に終わった。

「.....お見事、レーサー目指してんの？」

「...映画に出てくる運び屋に憧れてまして...裏の仕事続けているうちに身につきました...リカさん、約束忘れてないでしょうね？」

「...分かってるよ、私の負けよ...」

気づけば空は薄暗くなり、リカの家に着いた頃は夜の空であった。

「...お疲れ様でした、久々に色々とお話させて楽しかったです...！」

「...私もよ、明日も迎えに来るの？」

「...いいえ、いつも通り担当の人が来ますよ、何かあれば連絡して下さい...！」

「...分かったわ、それじゃあ今度一緒に服屋に行きましょう〜」

「...楽しみにしときます、それではまた」

リカはミユと別れ、仮住まいのマンションへ入って行った。仮住まいのため、あまり物は置いておらず、ほとんど寝るための空間であった。

リカはオートロックの鍵を開けて、郵便物を調べてエレベーターへと向かう、ここまではいつも通りであった。

リカがエレベーターに乗ろうとすると、後から一人、住人らしき男性が乗り込んできた。その男性は、無言のまま降りる階のボタンを押した。リカは自分の住家がある階で降りようとするが、ふと一緒に乗っていた男性のことが気になっていた。しかし、彼と特に何も起こらなかったため、リカは、安心して自分の住居室に向かった。

リカは扉の鍵を取り出し、鍵穴に挿し込んだその時...

「...ピ.....ピピ...」

「...！！...ドガンン！！！！」

突如、リカの住居室内は爆発を起こして炎に包まれた。

付近の住人は爆発音で驚き、非常ベルが鳴り響き、たちまち大騒ぎとなった。マンションの外にも野次馬が集まりだし、そこにはリカを尾行している人物もひっそりと紛れ込んでいた。

数分後、マンションの住人の通報により、消防車や救急車が出動し、サイレンを鳴らしながら爆発が起きた現場へと急行した。偶然、対向車線にミユが運転するロードスターが走行しており、リカが住んでいるマンションだと勘付いた彼女は、すぐさまUターンして引き返そうとした。

「...♪」

その時、ミユは確認のため、リカに電話を掛けた。驚くことに予想より早く応答があった。幸い爆発に巻き込まれたリカは、瞬時に反応して被害を免れていた。

「...先輩、今、何処ですか？」

「...マンションの裏口の階段を下りている途中よ...」

スマートフォンのスピーカーからリカの慌ただしい様子が伝わっていた。

「.....トラブルですね...何があったんですか？」

「...自分の家に入ろうとしたら中が爆発したわ...鍵が開いた時、かすかに電子音がした...どうやら爆発物が仕掛けられていたみたい...」

「...成程、無事で何よりです...もう外に出れますか？」

「...ええ、戻って来てくれるの？」

「...はい、裏に回るので少し待っておいてもらえますか？」

「...了解、寒いからなるべく早くね...」

ミユは、回り道をしてリカを迎えに行こうとしていた。

リカが住むマンションには、消防団員や救助隊が到着し、野次馬や報道陣などが押し寄せ、錯乱状態となっていた。そこから一人の市民が必死に抜けだそうとするが、その市民の正体は、リカを尾行している不審者であった。ミユたちに撒かれたBMWが近くの車道に待機しており、その車は不審者を乗せてそのまま闇へと消えた。

一方、リカはミユと合流してその場から去ろうとしていた。

「...まさか、あなたとのドライブを延長するとはね～」

「...このままディナーでもどうですか？いい店知ってるんですが...」

「...また落ち着いた時に頼むわ、今はとにかく眠い...ベッドで横になりたいわ...」

「...自宅にはしばらく戻れませんよ、今夜はどうするおつもりですか？」

「.....顔なじみのホテルがあるから、とりあえずそこで落ち着くわ...」

ミユは、リカの指示で宿泊するホテルへと車を走らせた。リカが宿泊するホテルは都内でも一流のホテルであった。ミユは、啞然としてリカと一緒にホテルに入って行った。フロントカウンターに向かうと従業員が丁寧に丁重に対応し、支配人の男性がリカたちの前に顔を出した。

「...急なんですけど、部屋空いてますか？」

「はい、丁度、一室キャンセルになりましたので...スイートをご用意出来ます！」

支配人は少しも焦る素振りを見せず、温かい表情で対応した。

「ありがとう、しばらくお世話になるわ」

「...リカさん、ここはよく利用するんですか？」

「...まあね、裏の仕事でよくお世話になってるわ、先輩に教えてもらったの」

「...そうですか～私も頑張らないと...」

ミユは、苦笑いを浮かべて内心落ち込んでいる様子であった。

「...お腹減ったな～あなたもどう？奢るけど...」

「...！」

ミユは、満面の笑みでリカの後をついて行った。一方、報道番組では爆発事件のことでリカのマンションが映っており、被害者であるリカの画像は全くの別人で偽名であった。リカの関係者の配慮により、正体は明かされず、彼女は、一切報道番組に目を向けず食事を楽しんでいた。

真夜中、リカを尾行していた一味は、車中である人物に状況を報告していた。

「...特に問題はない、今回は警告しただけだ、本番はこれからだ...」

報告を受けた人物は親玉のようで、部下たちに次なる命令を下した。こうして、興奮は冷めて一夜が過ぎようとしていた。

やがて朝日が顔を出して、また新たな一日が刻まれようとしており、リカはモーニングコールで目を覚まして軽く朝食を取った後、有楽町にある劇場に向かおうとした。彼女は昨夜の起きた事件を忘れそうになるくらい清々しい顔をしていた。

「お早うございます～」

リカは劇場の楽屋口から入り、共に舞台に立つ仲間やスタッフにいつも通り挨拶していた。

「...リカさん、お早うございます」

「おっ！アスカお早う～」

「お早う～お二人さん、今日も冷えるね～」

リカたちの前に年寄り臭い口調を発したのは、リカと同期のヒロコであった。

「...今日もよろしくね～」

「.....リカ、アスカ、ちょっといい？」

ヒロコは、小声でリカたちを呼び止めて、開いている個室へと誘い出した。誘われたリカたちは、首を傾げながら部屋に入っていた。

「どうしたの...ヒロコ？」

「...あんた、昨日の夜、自宅で爆発があったでしょう？」

「...！！」

「...やはり、リカさんの住んでいるマンションでしたか...」

リカは、昨夜に起きた爆破事件を仲間に指摘され、少々動揺していた。

「...身内には情報が筒抜けか～」

「事故じゃないでしょ？命を狙われる心当たりは？」

「...さて、裏の世界だと敵が多いからな～でも最近のことからほじくり出すと一つに絞られるね...」

「...例のテロリストですね...？」

リカは、アスカの発言に対して静かに頷いた。

「...だとすれば、昨日起きたことは合点がいくね...」

「...どういうこと？」

「実は昨夜、歌劇団の若手劇団員が、車の接触事故に遭いまして...幸いかすり傷で済みまし

たが...」

「...今、警察が衝突した車を捜索しているけど...あれは偶然起きた事故でも無差別の犯行でもないと思うよ...歌劇団の劇団員だと知って狙ったんだと思う...あんたの場合、死んでいた可能性が高い...！」

「...殺そうと思えば殺せた...わざと生かしたのね...その理由は？」

「...恐らくそうでしょう...前に起きたテロを阻止されたことに対しての報復か...もう手を出すなという警告かもしれません...後輩の歌劇団に危害を加えたのは見せしめかと...」

「...だとすれば黙ってられないね...待ってばかりじゃないと攻めないと...！」

「...あんたが張りきらなくても招待状は届いてるよ、以前に起きたテロの時のようにチームが結成されるみたい...昨日、チエさんたちが訪ねてきたのもそのためでしょ？」

「...二人も捜査に参加するの？」

「.....」

リカの質問に対して、ヒロコだけは浮かない顔であった。

「...悪いけど、私は今回パスさせてもらったよ...」

「...え？」

「...はっきり言って、今は表の仕事の方が大事なんでね...後輩のことも心配だし...」

「...そうか、そうだね...確かに今は舞台の方が大事だね...もう最後になるから...」

「...あんたは断ることは出来ないだろうね...今回の件の重要人物だから...」

「...私は捜査に参加しますよ、リカさんのバックアップに回ります...！」

「...ありがとう、我が後継者！」

「...私は舞台に集中して後輩を守ることにするよ...だからあんたは好きに動けばいい...」

「ありがとう、我が同期！」

リカたちは手を重ねていき、絆を深めようとした。そして、それぞれ舞台に立つ準備をした。その日も多くの観客が押し寄せ、席は満席になり、リカ率いる劇団員は笑顔を絶やさずファンの期待に応えていた。公演終了後、リカを尾行する者は現れず、彼女は一人で住家として代用しているホテルへと帰還した。

リカは、自分の宿泊部屋に着くまで周りの気配を気にしていた。念入りに探った結果、不審者は居ないようなので、彼女は安堵の表情を浮かべた。部屋に入ったリカは上着を脱ぎ捨て、ふかふかのベッドに寝転がった。

次の日は休演日であるため、やっと休息が取れるかと思われたが、リカにとって地獄の日に変わりつつあった。

## 第二話 弄ばれる麗人 前篇

---

その日、東京歌劇団劇場は休演日であった。よって、リカは朝になってもぐっすりホテルの一室で眠っていた。しかし、そんな彼女を邪魔する者が現れようとした。

「...♪」

その時、リカの専用スマートフォンに着信が入った。彼女は、しばらくしてから着信に気づいた。

「.....いて！」

リカは、ベッドから転げ落ちてゾンビのように這ってスマートフォンに手を伸ばした。

「...もしもし？」

リカは、かすれた声で電話相手に応答した。

「...急だけど、こちらの言う通りにして、今すぐ起きて下まで降りてきて、正面玄関口の駐車スペースで待ってる、乗ってる車はシルバーのNSXよ...」

「...え？ちょっと何なの？」

「...詳しいことは後で話すから、とにかく急いで！」

謎の電話相手は、名乗ろうとせず、リカを急かして一方的に電話を切った。彼女は訳が分からないまま、電話相手の指示に従うが、電話相手の声に心当たりがあるようであった。

ホテル暮らしをしているリカは、起きた後、ホテルの喫茶店でゆっくりと朝食を取っているが、それは急遽中止となった。リカは簡単に化粧を済ませてホテルを出ようとした。彼女が駐車スペースを見渡すと、シルバーのNSXが停まっており、リカは恐る恐る車に近づいた。すると、車のパワーウィンドウが作動して運転手が顔半分を出した。

「...ゲットイン！」

「...は？」

サングラスを掛けた運転手は、発音がいい英語でリカに車に乗るよう指示した。

「.....今日はお迎え要らないわよ」

リカは、運転手に気軽に話し掛けた。

「...分かってるわ、今日は休演日でしょ？別件で用があるの...」

「...最初見た時、何処の外人さんかと思ったわ、この車にその恰好だと目立つわね...」

「...あなたこそ、相変わらずスタイルがいいわね、どっから足伸びてんの？」

お互いよく知った関係で、会ってすぐ会話が弾んだ。謎の運転手は、リカと同じく歌劇団の人間であった。

名はマギー。歌劇団の注目スターの一人でリカと同期である。

父親がアメリカ人、母親が日本人のハーフである。幼少期からバレエや声楽を習い、児童劇団にも所属していたため、舞台の仕事を志していたと考えられる。歌劇団入団後、順調にキャリアを積んでいき、同じ劇団班に所属しているトップスターのミユを陰からサポートする役割を果たしている。裏稼業では優秀な密偵で、英語が話せることから海外遠征することが多く、テロリスト撲滅に力を注いでいる。

「...ミユは、どうしたの？」

「...うちのリーダーは色々忙しくてね...私は代理で来たの...例のテロの件で進展があったわよ...！」

「...！」

マギーはノートパソコンを開いて、リカにあるものを見せようとした。

「.....今朝、警視庁に一通のメールが届いてね...内容は犯行声明だったわ...！」

警視総監殿、警察の関係者諸君、名は明かせないが、私が最近世間を賑わせているバイオテロの実行犯だ！都内の公園で実行したテロは無事成功したので実に愉快だ、そこで調子に乗って、またテロを起こそうと考えている、発生場所は前回と同じく公園だ、とは言っても場所は簡単に

明かさない、都内にある公園の何か所かに毒ガス発生装置が仕掛けられている、制限時間内に発生装置を見つけられなければ順番に起動する、このゲームの参加を拒否すれば一斉に装置を起動させる...

「...成程、かなり挑発しているわね、でもどうしてわざわざ私を呼んだの？捜査員はいくらでもいるでしょう？一斉に探せば...」

「続きを読めば分かるけど...それは無理よ...犯人はあなたを指名している...！」

犯行声明のメールには、リカの写真が添付されていた。

「...これは最近撮られた写真ね...！」

「...あなただけじゃないわ、他の歌劇団員も盗撮されている、特にあなたが率いる劇団班のメンバーが多い...何処で嗅ぎつけたのかしら？」

「.....恐らく復讐するためよ、去年、私たちがテロを妨害したから必死に調べ上げたのよ...現に命を狙われたしね、関係者にも被害が出ている...！」

「...成程、だとすれば、まずいわね、もし、あなたが毒ガス発生装置の搜索を拒否したら、歌劇団員の裏の顔が秘密警察だとバラすみたいよ...また、毒ガス装置を発見出来なかった場合も、秘密警察の劇団員の顔がネットの無料動画で公開されるわ...！」

「...どこまでも汚いわね、完全に弱みを握られたわ...私たちの正体がバレればどうなるかを知ってしまった...！」

「...そういえば最近、警視庁のサーバーが不正侵入された時があった、サイバー対策課が対応に追われていたわ...公安の情報が目的だったのね...」

「...そして、秘密警察の捜査員と歌劇団の劇団員を照らし合わせて尾行を始めた...じわじわと苦しめて楽しんでいるんでしょう...」

「...とにかく、あなたじゃないと参加出来ない任務よ...全てあなたの判断にかかっている...！」

リカは重い責任を感じ、毒ガス装置の搜索を引き受けた。

「...でどうやって探すの？何か手掛かりが？」

「...メールに電話番号が書かれていてね、ゲームを始める前にこの番号に電話してほしいそうよ...」

リカは記された電話番号を確認して、自分のスマートフォンで電話を掛けようとした。

「...もしもし？」

「...もしもし？どうやら本人のようだね、声を聴けて嬉しいよ...」

相手の声は、変声器か何かで加工されているため、男性か女性かを識別することは不可能であった。

「...あなたがこのゲームの主権者ってわけね...私と会ったことはある？」

「.....さて、どうかな？.....君に恨みが...あることは...間違いない.....今は...私の指示に従って  
いれば.....いいんだ.....余計な質問は受け付けない...よろしく頼むよ...」

電波が悪いせいか、テロ実行犯の声は聴き取りにくかった。

「...いいでしょう...もう搜索を始めてもいいの？」

「...どうぞ、どうぞ、でも探す方法が.....あるのか？装置の数も.....仕掛けた場所もまだ教えて  
いないぞ...言っておくが...都内の...公園の数は...一万以上ある...」

「.....ヒントとかはないの？できたらお願いしたいわ...」

「...いいだろう、これはゲームだからね.....ところで君は何処にいる？」

「...宿泊しているホテルの駐車スペース...車の中よ...」

「...車？誰か...他に居るのか？」

「...ええ、一人居るわ、仲間でね、あなたに電話するよう言われたわ...」

「...成程、同業...者か？」

「...ええ、そうよ...」

「...理解して...くれていると思うが、ゲームに参加出来る.....のは君だけだ...外部と連携して...動くのは...ルール...違反だ...」

「.....彼女は私と同じ類の人間よ...それでも駄目？」

「.....そう...だな、彼女と...電話を代わってもらえるか？」

リカは、テロ実行犯に指示され、電話を代わろうとマギーにスマートフォンを渡した。

「...ハロー？」

「...おやおや、外人...さんか？」

「...半分アメリカ人の血が流れているわ、あなた、かなりクレイジーね...」

「...テロリストに...まともな奴なんていないよ.....君...名前は？」

「...マギーよ」

「後で盗んだリストで...調べるとしよう...君も公安の...人間だと...ということだな？」

「...まあね、私はどうすれば？」

「.....君には...エージェント・リカの足になってもらう...二人で毒ガス装置が仕掛けられている公園を...推理して...現場まで...運転するんだ...ただし少しでも...妙な真似をすれば.....分かっているね？」

「...ええ、あなたの言ったことに従うわ」

「よし、では...リカに...代わって...もらおうか？」

マギーは、リカの顔をじっと見て、スマートフォンを返した。

「...もしもし？」

「彼女とは...上手く打ち合わせを...した、そろそろ...ゲームを始めると...しよう」

「ヒントがあるんでしょう？」

「...ああ、ネット環境は...万全か？」

「...ええ、今丁度パソコンを開いているわ、ちゃんと開ける...」

「では...今から教える無料動画サイトを開け...そこにヒントが隠されている...」

「...どういうこと？」

「... `テロ 都内の公園、と...検索すれば、ある映像が...数秒間流れる...それは毒ガス装置が...仕掛けられた...公園の一部だ、そこから...何処の公園か...推理するんだ...」

「...それだけがヒント？」

「ああ、合計...五ヶ所の...公園に仕掛けられている...一ヶ所発見出来れば...また次の公園の映像を流すという手順だ...映像は一度観れば...自動的に...削除されるから...注意することだ...」

「...了解、もう動くわよ？」

「...ああ、一件目の...公園に着いたら...また連絡してくれ...幸運を...祈る...」

「.....あなたの方こそお大事にね...」

「...！」

リカは、テロ実行犯に謎の言葉を言い残して電話を切った。テロ実行犯はしばらくの間、体が硬直していた。

「...早速言われた通りに動画を観てみましょう...」

リカがパソコンを操作して、テロ事件解決のヒントとなる動画を開いた。動画が一件表示され、それを再生すると薔薇が咲いている映像が流れた。映像は一瞬流れて、それは削除された。リ

カたちは腕を組んで考え込んだ。

「ホワイ?...薔薇...?まだそんなシーズンじゃないわ...」

「...以前に撮られた映像かも...季節は関係ないよ、公園にあるものを示している!」

「...薔薇が咲いている公園って...?」

「...!!」

その時、リカは何か閃いて目が輝いた。

「...どうしたの?」

「...場所は分かったわ、車を出して!」

マギーは、リカを信じて愛車を発進させようとした。こうして、危険な公園巡りが始まろうとしていた。

「...それで何処に向かえばいい?」

「表参道の方に向かって」

「...表参道...というと...代々木公園...?」

「...そうよ、さっきの薔薇の映像...あれは代々木公園内の薔薇園よ...間違いない!」

「...詳しいわね、プライベートではインドアと思ったけど...」

「...結構外出するよ、散歩するのが好きだし、ミユより東京の地理は詳しいかも...」

「...頼もしいわね、私はタダ、指示通りに運転するだけよ...」

マギーはアクセルを踏み込み、表参道方面へと愛車を急行させた。

その時間、特に渋滞がなく、リカを乗せたマギーの愛車はスムーズに走行していた。移動中、

彼女たちは雑談をしていた。

「.....もうじき卒業だね」

「...うん」

マギーは、さりげなくリカの退団のことに触れようとした。

「...今はどんな気持ち？」

「...さて、いつもと一緒だけど...まだ卒業する実感がないよ...」

「...ヒロコも辞めるし、寂しいな～同期がほとんど居なくなる...」

「...そうだね、ちょっと前までは皆居て、賑やかだったのに...時間が経つのは早いね～辞めて家庭持って子供まで居るもんね」

「...それで退団後のご予定は？」

「.....まだ何も決まってないけど、とにかくゆっくりしたいね、家族と旅行行ったりしてさ〜」

「結婚する予定はないって言ってたけど、仕事は続けるでしょう？」

「...まあね、やりたいことはいっぱいあるし.....裏稼業は継続されるから...」

「...フリーになると過酷になるらしいね、海外遠征も増えるみたいだし...」

「...はっきり言ってやだね〜つい最近まで飛行機苦手だったし...」

「...宿命ってやつよ、上層部に上手いこと利用されたわ...ただフリーになれば、拘束されることないからまだましかな...?好きな仕事できるし...舞台の仕事続ける気？」

「...そうだね、芝居好きだし...」

「あなた、スタイル抜群だからファッション関係の仕事が増えるかもね、芝居方面だと海外も目指せるかも...」

「...冗談よしてよ、別に野望とかないよ、大きな夢だと考えただけで疲れる...」

リカたちは、車中で雑談を続けて少しでも嫌な雰囲気消そうとしていた。一つ目の毒ガス装置が仕掛けられていると思われる公園に近づくにつれ、緊迫感が高まり、彼女たちは長い一日を過ごすこととなった。

### 第三話 弄ばれる麗人 後篇

---

リカとマギーはテロリストが仕掛けた毒ガス装置起動を阻止すべく、仕掛けられた場所を推理して、直ちに向かおうとした。彼女たちは、一つ目の毒ガス装置が仕掛けられていると思われる公園付近に到着し、ひとまず公園の駐車場に車を停めて待機していた。

「...公園に着いたけど、これからどうすれば？」

「...ゲームの発案者に連絡するわ、そういう約束だったから...」

リカは、テロ実行犯に電話を掛けようとした。

「...もしもし？現場に...着いたのか？」

「ええ、代々木公園よ、正解なの？」

「...それは...まだ...言えない...車から降りてもらおうか？勿論、君一人でね...」

「...その後は？」

「...降りたら公園の中に入るんだ、言う通りに歩き続けろ...いいな？」

「了解...」

「.....あちらさんは何と？」

「...私だけが車から降りて、公園に入ってほしいそうよ...ちょっと行ってくるわ」

「...気を付けて！」

リカは、凜々しい表情をマギーに見せて一人で公園に入ろうとした。

「...そのまま...奥に進んで.....中央広場まで行くんだ...」

「...中央広場ね、分かったわ」

「...いくつか質問するが、スマートフォンの他に無線等、通信機器を持っていないだろうな？」

「...ええ、持ってないわ」

「...あと武器は所持してないだろうな？」

「...ええ、置いてきたわ」

「...では.....武器がないことを証明するために...そのレザーコートを脱いでもらおうか...？」

「.....！あなた近くに居るの？」

「余計な...ことを訊かなくていい...確かに...君は監視されて...いるが、気にしなくていい、勝手な行動をすれば...どうなるか分かって...いるだろう？」

リカは、素直にテロ実行犯の指示に従おうとした。リカは寒い中、コートを脱いで中央広場へと向かった。

「...うーさぶ、広場に着いたけど、どうすればいいの？」

「.....時計塔の...前に立て...しばらくじっと...してるんだ...」

テロ実行犯は、一旦電話を切り、リカは、震えながら時計台の前で立っていた。彼女は密かに監視している者の気配を探っていた。そして、数分後、テロ実行犯から着信が入った。

「...もしもし？」

「...待たせたな、確認出来た...一ヶ所目は見事...正解だ...おめでとう...！」

「...全く何がおめでとうよ...もうコート着て大丈夫でしょう？」

「...ああ、すまない...着てくれ、もう公園から出ても...大丈夫だ...」

「...それで例の装置は何処に？」

「.....見つける必要はない...こちらで責任を持って...回収しよう...」

「...信じていいのね？」

「ああ、大丈夫だ...まだ装置は四つある...急いだ方がいいんじゃないか？」

「.....そういえば制限時間は...?教えてもらってないけど...」

「.....おっと...!そうだったね、うっかりしていた.....タイムリミットは、今日の午後...六時までだ...それが過ぎれば...装置が作動するというわけだ...」

「...分かったわ、それでまた装置を探したらいいのね...?」

「...ああ、ヒントの...映像は投稿して...ある、また連絡を待っているぞ...」

リカは、気に食わない顔でマギーが待つ駐車場へと戻った。

「...結果はどうだった？」

「正解みたいよ、特に何も起こらなかったけど...何人かに監視されているようね...」

「...やっぱりね、私も待ってる間、妙な視線を感じたわ...」

「...とりあえず先を急ぎましょう、午後六時までに全部見つけないと装置が作動してしまう...！」

リカたちは、また同じように無料動画サイトを開き、ヒントで装置が仕掛けられた場所を特定しようとした。

「.....これは桜.....桜が咲く公園なんていくらでも...」

「...これはソメイヨシノね、芝生を囲む樹林の緑を桜の花が霞のように覆い尽くしている...これだけかなり絞れる...恐らく砦公園よ...車を出して！」

「...オーケー！」

マギーは、リカの推理を信じて、また新たな目的地へと愛車を走らせた。

リカたちは、制限時間まで身勝手なテロ実行犯に振り回されることとなった。タイムロスにならないよう、慎重かつ迅速に対応している彼女たちであったが、一般市民誰一人、危険に晒され

ていることを知らずにいた。

リカたちが賢明に毒ガス装置を捜索してからかなり時間が経っていき、空は薄暗くなっていった。タイムリミットが迫って行き、彼女たちは焦りの表情を浮かべていた。疲れも出始め、運転するマギーは、度々目を擦っていた。

「...運転替わろうか？」

「...大丈夫よ、あともう少しだから...」

マギーは、リカの気遣いを断るのには理由があった。

「...後ろが随分騒がしいわね...しつこいったらありやしない...」

リカたちの後方には、複数のパトカーが、サイレンの音を響かせながら追い掛けて来ている。

「...そこのNSX！停まりなさい！さっきから制限速度をオーバーしている！何か薬でもやっているのか？」

リカたちを追う警官は、何度も呼び止めるが、ずっと無視されていた。

マギーは、一秒でも早く公園に着くため、強引に運転してスピード違反をしていた。外部との接触は禁じられているため、彼女たちは車から降りることが出来ず、無視して逃げ切るしか手段がなかった。

「...タイムリミットはあと一時間もない...ぎりぎりってところかな...？」

「...あと一ヶ所、この噴水...この周辺の街並み...日比谷公園に間違いないわ...！」

「...行き慣れた場所ね、途中、劇場の前を通るかも...」

安堵の表情を浮かべ始めるマギーに対して、リカの表情はまだ曇っていた。

「.....これでテロ行為を防げるわけだけど、どうも腑に落ちないわ...」

「...まだ何か企んでいるってこと？」

「...分からないけど、これが本気とは思えない...以前に起きたテロ行為と比べれば生温い...！」

「...確かにそうね、さっきからパトカーの他に不審車両が見えるけど、何もしてこない...ただ監視しているだけ...拍子抜けしちゃうわ...」

「...とにかく今は指示された通りに動きましょう...毒ガスを撒くのは間違いないわ...」

リカたちは、テロ実行犯の思惑を探りながらテロの標的になった最後の公園を目指そうとした。

日比谷公園には制限時間以内に到着したが、パトカーがしつこく付き纏い、公園付近に停車出来ずにいた。

「...停まれば一緒に捕まるわ...どうする？」

リカは困り果てている様子だったが、マギーには策があるようであった。

「...私が囷になるわ、あなたはそのまま飛び降りて公園に入って...！」

「...了解」

車は停まろうとせず、リカは、マギーの指示通り、扉を開けて車内から飛び降りようとした。

「...バツ」

自分のタイミングで飛び降りたリカは、体勢を崩すが、すぐに立ち上がり公園内へと走り去った。警官たちは、リカを追跡せず、マギーが運転する車の方を追跡した。

リカは余計なことを考えず、一心不乱に走り抜けた。公園内に足を踏み入れた彼女は、テロ実行犯と連絡を取ろうとしていた。

「...どうやら着いたようだね、時間には間に合いそうだ...」

「...！...場所は合っているようね？」

その時、リカはあることに気づき、表情が一変したが、悟られないよう対応しようとした。

「...ああ、一応確認のためにある場所で待ってほしい...日比谷公会堂の前に行ってくれ...」

「...分かったわ」

リカは指示通りに公会堂に向かった。着いた時の時間は、制限時間の五分前で充分間に合った。

「...よし、これで合格だ、おめでとう、よく五ヶ所全てを見つけ出したね...」

「...これで終わり？意外と呆気なかったわね...」

「...ふ、本当は心底焦っていたんだろ？もし、間に合わなかったら五ヶ所全ての毒ガス装置が作動していた、結構スリルがあっただろ？エージェント・リカ...」

「.....その言葉、本人の口から聞いたかったわ」

「...！何を言っている？」

リカは、突然、意味深な発言を投げ掛けた。

「...あなた、さっきまで話していた人じゃないわね...誤魔化しても無駄よ...！」

「.....なぜ分かった？」

「...口調で分かったわ、さっきまで対応していた人物の声はどうも聴き取りにくくてね...電波障害だと思っていたけどそれは違い、滑舌が悪いわけでもない...話す途中で途切れる現象が起きるのは、息切れのせい...どこか体の調子が悪いようね？どう正解？」

「.....ふ...ふ...ははは...君は思った以上にやるじゃないか...気に入ったよ」

その時、電話相手のテロリストは表情が和らぎ、思わず笑みがこぼれた。

「...付け加えるなら、あなたの方は優しい口調で落ち着いているわ...さっきまで話していた人は男性口調だったけど、どこかぎこちなかった...女性かもしれないわね...」

「...推理するのは勝手だ...」

「...さっきの人は電話に出れないの？声が聴きたいんだけど...」

「.....色々と事情があつてね、今は出れない...だから俺が代行している...」

「...成程、あなたは以前に会つたかな？」

「いや、ないだろう、初めましてだ、関西で起きたテロ事件では大活躍だつたそうじゃないか...」

「...まあね、あの続きがしたいの？」

「ああ、今までそっちの身の回りで起きたことは警告だ...予行練習に過ぎない...テロはまた起きる...！」

「...次もゲーム？」

「...いや、難易度は非常に高い...大きな花火を上げるつもりだ...その時は君以外にも参加してもらつつもりだ...」

「...そのイベントは開催されるの？」

「...それはまだ秘密だ...じき分かるだろう、次で決着をつけようじゃないか...」

「.....楽しみに待ってるわ」

「それじゃあ、ひとまずお別れだ」

「ええ、さっきの人にお大事にと伝えておいて...」

リカの電話相手をしていたテロリストの男は、静かに電話を切って一息ついた。

「...全てお見通しのようなだ、さすがに手強いな...」

今、電話対応したテロリストの正体は、緋岡であつた。彼は今のテロ組織にとって、なくてはならない存在であつた。

「...はあはあ.....彼女は私の...獲物よ、あなたでも...譲れないわ...！」

暗闇の部屋の中には、緋岡の他にもう一人居て、その人物はベッドで横になりながら電話のやり取りを聞いていた。

「...口は達署のようだが、そんな体で戦えるのか？」

ベッドで横になっているのは、テロの主謀者である城ノ内であった。彼女は。筋力増強剤の副作用で日に日に体の線が細くなり、点滴を打つほどまで体力が落ちていた。

「...そうね、さすがにやばい...かも...たまに三途の川が見える...」

「...そんな冗談が言えるならまだ大丈夫そうだな...まだ死ぬなよ」

「...ええ、指揮は...あなたに任せるわ...」

城ノ内と緋岡は、お互いに手を握り締めて絆を深めた。

一方、リカはマギーのもとに戻ろうとしたが、公園を出るとパトカーが何台も停まっており、中心にはマギーが居て、彼女たちは完全に包囲されていた。

「...やれやれ」

リカたちは素直に警官たちに従って連行されていった。また、彼女たちを尾行していたテロの一味も引き揚げようとしていた。何はともわれ、リカたちはテロを阻止して、物々しい雰囲気から解放されることとなった。

日は暮れて、厳しい寒さが目立つ夜となった。リカたちは警視庁に連行され、しばらくの間拘束されることとなったが、ニュース番組では公園のテロ未遂事件に触れようとしなかった。勿論、リカたちの名も挙がらなかった。

警視庁 地下駐車場

夜も更け、駐車場内は人気がなく、ひんやりとしていた。しかし、そんな状況の中、二つの影が足を踏み入れようとしていた。地下につながるエレベーターから一つの気配が感じ取られ、それは足音を立てて、自分の車が駐車された場所へと向かおうとした。その気配の正体は、マギーであった。

「...！」

その時、マギーはもう一つの気配に気づき、驚愕した様子であった。

「...ようやくお帰りですか？」

マギーを待っていたのは、ミュであった。

「...うん、やっと解放された、幹部の説教が長くて...疲れたよ...」

「はは、少し騒ぎになったようですが、事件は無事解決したようですね...！」

「...まあね、リカの手柄よ」

「...彼女は？」

「先に帰ったよ、明日、公演があるからね」

「マギーさんもお疲れ様でした、どうでした、久々の共同作業は？」

「...少し冷や冷やしたけど、悪くはなかった...結構楽しめたわ」

「そうですか、表稼業が忙しかったもので...本当に助かりました」

「...ずっと私を待ってくれてたの？」

「そう言いたいところですが、実は上の人間と会う約束をしておいて...」

「...あらそう、じゃあ先に失礼するわ」

「お休みなさい！」

マギーはミュに別れの挨拶をしてNSXに乗り込み、その場を後にした。ミュは、公安の部長に会おうとしていた。

一方、リカはホテルに到着し、疲れ果てた表情で自分の宿泊部屋へと向かおうとした。

「...！」

その時、リカは扉の前で何故か立ち止まり、胸騒ぎがしていた。部屋の中から気配を感じた彼女は、サイレンサー（消音装置）付きの愛銃を構えて相手に気づかれないよう入室しようとした。部屋に足を踏み入れると奥から音が聴こえており、それはテレビの音のようであった。部屋を荒らされた形跡は見当たらず、リカはそっと侵入者の後頭部に銃を突きつけた。

「...は？」

その時、リカは聴き覚えのある声を耳にした。

「...あれ？あんた何してんの？」

リカの前に居るのは、ヒロコであった。彼女は、呑気にリカの宿泊部屋でバラエティー番組を観ていた。

「...あんたこそ何処に行ったのさ～せっかく遊びに来たのに～電話も通じないし～」

「...ああ、ごめん、ちょっと大事な用事があって...」

リカはすぐに銃をホルスターに戻して、あえて今日起きたテロ未遂事件のことを話さなかった。

「...私、今日暇でき～ここで待たせてもらったよ、私もこのホテルは顔馴染だからすぐ入れてくれたわけよ～」

「...あらそう」

リカは、ほっとして疲れと空腹に耐えられずその場にしゃがみ込んだ。

「あれ？どうしたの？」

「...朝から何も食べてないの...もう死にそう.....」

リカたちは、食事を取るためにホテル内の行きつけの高級鉄板焼き店へと足を運んだ。

「ぷは～」

リカは、店内で水を飲み干して気分を落ち着かせていた。

「...何しに行ってたの？死にそんな顔だったけど...」

「野暮用よ、もう説明するのも面倒くさい...あんたこそ本当に暇つぶしできたの？」

リカの質問に対して、ヒロコは険しい表情を浮かべようとした。

「.....実はここだけの話、あんたに伝えたいことがあって来たわけよ...」

「...内容は？」

「...先日、公園で起きたテロの件よ、園内の防犯カメラに犯人らしき人物が映っていた...」

「それで？」

「...疑いのある人物は全員、事情聴取したけど、ど素人よ、ほとんどが学生、ただ雇われただけだと、指示通りに動くと、ロッカーの鍵を手に入れ、駅前のコインロッカーに辿り着いたそうよ、開けてみると、中には紙袋と茶封筒が入っていて、紙袋の中は覗くと言われ、茶封筒の中を覗くと大金が入っていて、それは今回の報酬だと言われたそうよ」

「...その紙袋の中身は恐らく毒ガスの発生装置ね、それを彼らに仕掛けるよう指示した...」

「そういうこと、指示した人物とは電話でやり取りしていたから顔は分からないと...声も加工されていて識別は不可能、手掛かりは掴めてないわ...」

「...調べる必要はないわ、相手は私が目的でしょう...あんたもよく知っているメンバーよ...」

「...城ノ内...ね」

「...そう、逆襲ってやつよ」

「...いやに落ち着いているはね、彼女を止められる自信があるの？」

「...さて、やってみないと分からないわ、ただ、今は私たちにとって大事な時期よ、それを邪魔するのなら誰だろうと容赦しない...！」

ヒロコは、リカの生き生きとした目を見て、一安心の様子であった。

「...さあ暗い話は止めて食べよう、今は体力と栄養補給しないと、私が奢っちゃう！」

「マジ？さすが太っ腹～お腹パンパンになるまで食べよう～！」

リカは、ヒロコの奢りで食事を存分に楽しんで、翌日の公演に備えた。その夜、雪がちらちらと降り始め、寒波が都内を覆っていた。これにより厳しい寒さは続くようで、災いが降り掛かるのを予兆しているようであった。

## 第四話 報復×毒牙

---

東京 某市街地

「ザ...ザー...」

その日、全国的に悪天候で、雪がちらついた地域もあり、やがてそれは、冷たい雨と変化して夜まで降り続けていた。某市街地にある古いアパートの一室を城ノ内率いるテロリスト残党がアジトとして使用していた。

城ノ内は、薬物の副作用の影響で体調が悪くなる一方であった。老化が進み、髪の色は全て白髪となり、皺も増えてまるで高齢の老婆であった。そんな彼女は、目を覚ましてベッドから起き上がり、薄暗い部屋で仲間の緋岡と話をしていた。それは深刻そうな様子であった。

「...本当にいいんだな？」

「.....ええ、どうせもう長くないわ...」

城ノ内は、緋岡に何か頼みごとをしているようであった。

「.....今、そうして生きているのは奇跡としか言いようがない...そんなに自分を追い詰めてどうする気だ？」

「...ふふ、こんな状態では足手まといになるわ...だからもう最後の手段を使うしか.....最後の我がままよ、お願い...あなたにしかお願い出来ないわ...」

緋岡は、頼まれた内容に気が進まないようであったが、城ノ内は、真っ直ぐとした目で彼の手を握りながら頼み続けた。

「...分かってるだろうが、一度やってしまえば後戻りは出来ない...お前を助けることは無理だ...」

「...大丈夫、もう決めたことだから...」

城ノ内の決心は揺るぐことはなく、緋岡の方は数秒間目を閉じ、一度溜め息をついた後、ある決意をした。

「.....よし、分かった、言う通りにしよう」

「...ありがとう」

「...これで終わったらどうする？」

「...私が居なくても続けられるでしょう...？まだあなたが居るんだから...」

「...朝居とお前が居なくなると締まらなくなるな...」

「...彼も私も助かる道はないわ、ただ一本しかない道を進むだけ...何も怖くない...」

「...俺だって立派な共犯だ、後悔することは何もない...どうでもいいことだ...」

城ノ内は、落ち着いた顔で筋力が落ちた片腕を緋岡に差し出した。緋岡は、注射器を取り出して、城ノ内の腕にある薬物を注入した。

「.....！！！」

その時、城ノ内の様子が一変した。彼女は、顔色を悪くして苦しみに耐えられず膝をついた。

「.....！」

緋岡は、城ノ内が苦しむ姿を黙って見ることに出来なかった。

「...あ...が.....！！」

城ノ内はたちまちもがき苦しむ、倒れ込んでしばらく立ち上がることはなかった。

「...もう薬が回ったか...」

城ノ内の体内に投与された謎の薬物は、すぐに全身に回り、彼女の体の自由を奪っていった。しかし、城ノ内にとっての地獄の体験はこれからであった。

それから数日後経ち、場所は都内の某ビジネス街、時間帯は通勤時間で高級スーツを身に纏った者たちが、無表情で勤め先へと向かっていた。それはまるで精密なロボットの動きのようで気味が悪いくらいであった。その日もいつものように静かな朝を迎えようとしていたが、あとわず

かで歯車は崩れようとしていた。

「...？」

その時、一人のビジネスマンが急に立ち止まり、どうも様子がおかしかった。そのビジネスマンは、顔色を悪くして静かに倒れた。

「...この人、どうしたんだ？...ざわざわ」

倒れたビジネスマンを心配して、たちまち人だかりができた。

「?...はあ、はあ...」

しかし、倒れた者を心配する彼らもまた、気分が悪そうな表情を浮かべて気を失い、一斉に倒れていった。街中は異様な空気に包まれ、慌ただしくなりつつあった。しかし、これは始まりに過ぎなかった。

通報を受けた救急隊は、直ちに急行して現場に向かったが、急に大勢の人間が倒れた場所は一ヶ所だけではなかった。また違う場所でバタバタと人が倒れて対応に追われることとなった。被害者の体内を調べた結果、即効性のある毒性の薬物を吸ったことが判明し、それは以前、都内の公園で使用されたものと同じ成分であった。これにより事件性があると発覚し、警察組織が動き出そうとしていた。

警視庁 通信司令部

通信司令部にはバイオテロに関する通報が殺到して、職員の大声が飛び交い、緊迫感が漂っていた。

「部長、また新宿区で人が倒れたと通報が...！主に都心エリアが狙われています！」

「.....人が多く集まる時間、場所に発生している...計画的犯行だな...！」

通信司令部の責任者は、残忍な犯行に苛立ちを覚えていた。

警視庁 公安部部長室

「...街中が大パニックだ、犯人が分かっているが振り回されてばかりだな...」

「...もう彼らの好き勝手にさせるわけにはいきません...これでケリを着けないと...手筈は整って

います...！」

室内では、部長の新沼と課長の本澤が険しい表情でテロについて口論していた。

「...彼女は動けるのかね？」

「...はい、今日は休演日です、問題なく動けます...！」

「そうか...対策チームは揃ったのだな？」

「...はい、担当を分けて動かすつもりです」

「...結構、迅速に対応するよう伝えてくれ」

「...はい」

「.....コンコン」

その時、部屋の扉がノックされ、一人の職員が入室した。

「...どうした？」

「テロの事件の件で緊急の作戦会議を行います...新沼部長も会議室にお越し下さい...！」

「分かった...では本澤、後のことは頼む」

「分かりました」

警視庁の会議室には続々と警察官僚の人間が姿を現していた。警視庁トップの警視総監も現れ、彼が席に着いた途端、空気は次第に重たくなった。新沼も会議に参加して、本部からこれからの成り行きを見届けようとしていた。

一方、リカは宿泊部屋できびきびとした動きである準備をしていた。その後、彼女は荷物を持って、受付ロビーでチェックアウトを済ませようとした。

「...随分と世話になったわね～」

「...もう出られるんですか？少し早いのでは...？」

「...今日で仕事が片付きそうなの、ひとまず出るわ...」

「...そうですか、またのお越しをお待ちしております」

「...ええ、今度はプライベートで来るわ」

「はい、お気軽にお申し付け下さい！」

支配人とスタッフたちは、丁寧にお辞儀をしてリカと別れた。

ホテルの外に出ると、駐車スペースにタクシーが多く停まっていたが、リカはそれを利用せず、まっすぐある車の方に向かった。それは赤のアウディA5で、彼女が車に近づくと運転手が車内から出てきた。

その運転手はアスカであった。彼女は車のトランクを開けて、タクシーの運転手のような振る舞いでリカの荷物を入れようとした。

「...悪いわね、最近身内の送迎が多いもので...」

「全然構いませんよ、みんな待っています、急ぎましょう」

リカたちは、誰かと待ち合わせしてるようで直行しようとした。

「どこの局もテロの特集をしているわね」

「...ええ、二十年前に起きた事件の再来と言われてますから...でも今回の方が確実に規模が大きい...被害者は増える一方です...！」

「...ついに動いたのね、総力戦なのはまあ違いはない...！」

リカの声のトーンは低くなり、しばし緊張している様子であった。

アスカが運転するアウディは、ある雑居ビルの駐車場に向かっていた。車を駐車した後、二人は同じ駐車場に駐車された黒いバンへと向かおうとした。車内にいる人間はリカたちの気配に気づき、ドアを開けようとした。ドアを開けた人物は、リカたちと顔馴染であった。

「...あれ？久し振りだね～」

「ええ、お久しぶりです～」

車内を見ると改造されていて、監視用のモニターやハイテク機器が多く搭載され、即席の秘密基地のようであった。車内の空間は薄暗く、そこに何人かの気配があり、その正体は今回のテロ対策メンバーであった。

まず一人目は、リエ。リカが所属する歌劇団のOGで、現在は前職を活かして舞台の仕事を続けており、テレビやイベント出演なども積極的に行っている。裏稼業の密偵活動は、結婚したため一時休業することとなった。

二人目にユウコ。歌劇団のOGで、身長は一七九センチと、歌劇団在籍時、歌劇団劇団員の中で最長身を誇っていた。歌劇団時代は二枚目の男役やコミカルな役、悪役等、芸の幅を広げて舞台に立っていた。退団後も舞台の仕事を続けている。体が大きいことから男に間違えられたり、怖がられたりしているが、性格は温和でお茶目な一面を見せることがあり、そのギャップが彼女の魅力ともいえる。一方、裏稼業では危険区域の潜入、殲滅を任されており、彼女に敵う者は数少ない。自慢の体格を活かして、使用する武器はバズーカ砲や大型火器等である。また特殊な乗り物も操作でき、戦闘機やヘリ、戦車なども操縦することが可能である。

三人目はアヤカ。現役の歌劇団スターで、実力は認められ、劇団員のエリートが集まる班に配置換えとなった。可愛い表情が特徴だが、演技派で数多くの個性的な役を見事にこなしている。裏稼業では変装を得意とし、敵地に潜入して情報収集を行っている。

四人目はミサト。歌劇団時代、歌唱力がある注目スターであったが、結婚を理由に退団した。退団後は演技の世界や芸能界で日々活躍しており、地元を愛し、ふるさと大使を務めている。裏稼業は結婚後も継続して行っており、戦闘能力は衰えていない。

五人目はチヒロ。歌劇団時代、実力派スターとして名を上げていたが、ミサトと同じく、ファンに惜しまれつつ早期退団した。退団後も舞台女優として活躍の場を広げている。切れのあるダンスを得意とし、スレンダーな体格で驚異の身体能力を誇る。裏稼業も続けており、同期であるミサトとコンビを組んで任務を遂行している。

六人目はクミコ。現役歌劇団スターで長年世話になった班から離れ、新たな力を引き出すため、別の班に配置換えすることが決定した。クールな印象があるが、趣味はアニメ鑑賞で好きな動物はアザラシと可愛い一面を見せる。裏稼業でもキャリアを積んでいき、旧式装飾銃で敵地に乗

り込んで暴れ回っている。

以上六名がテロ対策チームに参加し、彼女たちは、リカたちが来るのを首を長くして待っていた。リカは、突然の仲間との再会に嬉しさの感情を露わにした。

「...うわ～なんか懐かしいな～最近辞めた人も十年くらい会ってないような感じがする～」

「あなたもついに退団するんだね～」

「ええ...ユウコさん、あいかわらず大きいですね～貫禄ある～」

「...これでもちゃんと舞台の仕事では女性の役やってるのよ～」

「へえ～観に行きたいな～そちらのお二人さんも元気そうだね～」

リカは、次にミサトとチヒロと目が合い、和気藹々と話そうとした。

「...リカさんの公演、先日観に行きましたよ～最高傑作ですね～！」

「ありがとう～結婚したんだって～？どう順調？ねえねえ？」

「はい、まあ...仕事は続けています」

リカは、ミサトが結婚したことに興奮して顔を近づけながら話した。

「リカさんは結婚の予定とかないんですか？」

「...そんなのないない...と言っておきましょうか～」

リカは、チヒロの質問に笑って答えた。

「...さっき久々に歌劇団の仲間と会いましたが、生き生きとしてました、リカさんの力が行き届いているのがよく分かります、同期のアスカと後輩のクミコも以前より逞しくなりましたね～」

「私は別に何もやっていないよ、彼女たちはほっといても成長していくんだから安心して辞められるよ...それより舞台の主演おめでとう～さすがはチヒロちゃん♪」

「はは、ありがとうございます！」

リカとチヒロは、お互いを褒め合って楽しんでいた。

「...あんたこそ立派になったじゃないの、新人だった頃が懐かしい～」

「あ...リエさん、この前はどうも～」

リカは、先輩のリエの存在に気づいた。

「年末の大阪でのテロ事件、お見事だったわ、諸先輩方も褒めていたわよ...」

「...ありがとうございます、でも主犯格を取り逃がしたので悔やみきれません...！」

「...この商売、予期せぬことが起きて当たり前よ、舞台の仕事だってそう...失敗すればまた挽回するしかない...」

「はい...リエさんもこの任務に参加するんですか？」

「ええ、参加するわ、しばらく体調が悪いんで現場はお休みしてたけど、完治したから本格的に復帰することにしたの...それに現役のあなたたちの姿を見て、さらにやる気が出たわ...」

「またよろしくお願いします！」

「.....コホン、感動の再会のところ悪いんですが、そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか？」

リカたちの雑談に水を差そうとしたのは、アヤカであった。

「...あ！アヤカちゃん、しばらく見ないうちに立派になったね～！」

リカは、アヤカの肩を叩いて勝手に感動していた。

「.....あっどうも...お褒めの言葉、感謝しますが、テロの話を.....」

「お互いまだ新人だった頃、よく共演したよね～友達とか恋人の役とか...ふふ」

「...そうですね、リカさんからは色々と学ばせてもらいました...」

「あっそうだ...昇進おめでとう、アヤカちゃんは実力派だからプロフェッショナル集団に入れると思ったよ！」

「...あ...ありがとうございます、これからも精進して頑張るつもりです.....」

アヤカはリカのペースに飲まれ、雑談はしばらく続くのであった。

同じ頃、警視庁会議室、今朝から起きているテロ事件により、緊急作戦本部が設置された。作戦会議の参加メンバーが招集されたことで本題に入ろうとした。

「...それではテロ対策の会議を始めます、まず被害状況を...」

警察幹部の一人が会議を仕切り、職員の一部が現状を報告しようとしていた。

「...現在のところ、テロの被害者の人数は二百三十六名、うち百八十五名が重症で、病院に搬送されて治療を受けています...なお、検出された毒物は、去年に起きたテロ事件で使用された物と同じだったため、押収した解毒剤が役に立っているようです...ただ数に限りがあり、足りるかどうかは問題です...」

「...テロ事件はまだ続いているのか？」

「...はい、都心エリアを中心に発生しています、被害者はまだ増えるかと...」

「...先日、都内の公園で起きた毒ガス事件とのつながりは？」

「あります、被害を受けた現場を調べると、毒ガス発生装置が入った紙袋が発見されました...犯行手順は同じです...」

「...つまり去年の年末に起きた事件も含めて犯人は同一人物だということだな...？」

「...はい、こちらをご覧ください...」

報告する職員は、プロジェクターを用意し、警察幹部たちにテロの主要人物について説明しようとした。

「...テロ事件の主犯ですが、まずこの男性、朝居恒彦（38）、彼が多くの命を奪った毒物の開発者で、神戸の警察の手により逮捕されました...今回の件で朝居の身柄は東京拘置所に移される予定です...彼はまだテロについて何も話そうとしません...」

「...その朝居という男の指示とは考えられないのか？」

「...本人の口から聞いてみないとはっきりとしたことは分かりませんが、彼の日記に都内でテロを実行するようなことが綴られていました...彼の意志ということは間違いありません...」

「...朝居を捕らえても力は衰えていない...大阪ではテロの一味を取り逃がしたようですね...新沼さん？」

警察幹部の一人が、新沼を睨み付けて非難しようとした。

「.....それは本当に申し訳ないと思っている...対策チームを再結成して搜索をさせています...！」

「...ほう、名誉挽回ということですか？」

「...そういうことです、こちらは勝手にやらせてもらっていますのでご了承下さい」

「相変わらず、公安は協調性がないですね、搜索にあたっている者の名前も明かさないうもりか？」

「...はい、そういう規則ですので、特にあなたに話す気にならない...」

「...何だと！！」

新沼たちの言い争いにより、会議室内はざわつき、一時険悪な空気に包まれた。しかし、ある人物が乱入したことで雰囲気は一変した。

「.....子供がするような口喧嘩を続けたいのなら外でやらしてもらおうか？君たちが馬鹿騒ぎしている間にも多くの尊い命が失われようとしているんだぞ！恥を知れ！」

新沼たちは、警視総監の怒号に驚愕し口を閉ざした。室内は一気に静まり返った。

「.....申し訳ありません、総監...以後気を付けます...！」

警察幹部の男は、警視総監に深々と頭を下げて反省の意を述べた。

「...こちらも冷静さを失って、つい感情が表に出てしまいました...申し訳ありません...！」

新沼もまた、反省の意を警視総監に述べた。

「...残忍なテロリストを捕まえたいという気持ちは分かるが、もう少し心を開いてはどうか？  
特別な扱いだが、同じ組織の人間なんだから...」

「...はい、こちらで入手した情報は、必ず知らせます...ご心配なく...」

「...そうか、単独で捜索するのは許可しよう...信じているぞ...！」

「はい！」

「...では少し話が横道に逸れたが、話を続けよう...朝居以外の主犯格を教えてもらおうか？」

「.....あっはい！お教えします！」

啞然としていた報告者は我に返り、説明を続けようとした。プロジェクターで映し出された映像には城ノ内の姿があった。

「...この女性がテロの主犯格...元自衛官のようだな...？」

「...はい、彼女は.....」

「.....私が説明しましょう」

新沼は、手を挙げて警視総監の許可を得ようとしていた。

「...いいだろう、新沼君、説明したまえ...」

「...はい、彼女にはあるトラウマがあります、それがきっかけで凶悪なテロリストに変貌したんです...」

「...その...トラウマとは？」

「五、六年前、現役の自衛官だった城ノ内は、男性自衛官たちに集団強姦されました...彼女はそれが原因で除隊となりました...」

室内にいる警察幹部たちは、城ノ内の件について全く知らないようで、驚きのあまり口が開いたままであった。

「.....そんな不祥事、いずればれるだろう、メディアも取り上げるはずだ.....もしや...！」

「...はい、隠蔽工作进行了、組織ぐるみでね...彼女の経歴も抹消されました...」

「...なんと、それで彼女は...？」

「...強姦されたことを公表しようとしたが、相手は手強く妨害され表舞台に立てなくなりました...」

「...当然のことだが敵うわけがない、我々でも踏み出せない件だ...実にショッキングだ...どうやって調べた？」

「...優秀なタレこみ屋がいて、名は明かせませんが...」

「...一応そちらの報告も訊いておこうか？」

警視総監は、たじたじの報告者に目を向けた。

「...あの、今おっしゃったことと比べればたいしたことありません、何せ、城ノ内に関する情報提供は公安部ですし...」

「...成程、情報の宝庫だな、テロメンバーには他にどんなメンバーが？」

警視総監は、報告者に別の質問をした。

「...例の大阪テロ事件で逮捕した犯人のことなら分かりますが...」

「...教えてくれ」

報告者は、逮捕したテロリストの写真を映像に流して、経歴リストを警察幹部たちに配った。

「...逮捕した人数は五十二名、そのうち半分以上の人数が重傷で、大阪の病院で入院しています...お配りしたリストをご覧になれば、お分かりになると思いますが、まともな人間が少なく、前科者が多い、暴力団関係者や元警官なども居ます...」

「...城ノ内の他に元自衛官は？」

「...確認したところ十人程居ました...中でも元陸上自衛官の神成信哉は、異常で仲間を何人も射殺して、除隊後も悪事に手を染めています...兄も元自衛官のようです...幹部階級は居ません...」

「...よくこれだけ罪人を集めたな、かなり確保したようだが、まだ残党がいるということだな...？」

警察幹部たちはリストをぱらぱらと捲りながら目を通し、呆れている様子であった。

「.....こちらの対応ですが、所轄の警察署にテロ対策本部を設置しました、さらには都内の公共交通機関は運転停止させ、厳重に検問を張り、都内から出さないよう封鎖...毒物は警官隊が総力を上げて捜索中です...また、テロリストは強力な銃火器を所持している恐れがあるため、S A T（特殊急襲部隊）を出動させたいのですが...」

報告者は、S A Tの出動要請の許可を警視総監から取ろうとしていた。

「勿論、許可する、ただ一般市民の安全が第一だ...！」

室内は緊迫感が増し、深刻な現状を知った警察幹部たちは、テロに関する有力な手掛かりが見つかるのを静かに待っていた。

同じ頃、雑居ビルの駐車場に停められたバンの中で、リカたちはようやくテロに関してのことに触れようとしていた。

「.....少し話が横道に逸れましたが、テロの対策会議を始めたいと思います.....」

「...あなたが今回指揮を？」

「...ええ、本当ならミチコ先輩が指揮をとる予定でしたが、本業の舞台の仕事で忙しいため、

急遽、私が担当することとなりました...よろしくお願いします...！」

アヤカはリカの質問に答え、メンバーの中心に立って仕切ろうとした。

「...メンバーはこれで揃ったの？」

「...いえ、まだ居ます、他のメンバーはすでに別行動で動いています...我々だけで始めましょう.....現状ですが、今も多くの一般市民がテロの標的にされています...住宅区域にはまだ被害はなく、警官隊は都心部を中心に毒ガス装置を捜索中...我々は独自の判断でテロを阻止しようかと思うのですが...」

「...どうすれば？」

「...我々の任務は、毒ガスを見つけることより犯人を見つけることが最優先です...」

「...見つける手立ては？」

「...それなんです、まだ犯行声明も出されていないので...連絡待ちということです...」

「これでは動きようがないわね...」

テロ対策メンバーは、相手の動きが分からず沈黙して苛立っていた。

「...♪」

その時、リカの専用スマートフォンに着信が入った。発信者は不明で、リカは周りの目を気にしながら恐る恐る電話に出ようとした。

「...もしもし？」

「.....お久しぶりね、女スパイさん...私のことを覚えている？」

謎の発信者の声を聴くと女性の声で、リカは心当たりがあった。

「...勿論、覚えてる、今日は地声で掛けてきてくれたのね...丁度あなたの声が聴きたかったところよ...」

電話の声の主は、城ノ内であった。リカは、仲間たちに合図を出して、城ノ内の声を聴かせようと電話のスピーカー機能を利用した。

「...先日はどうも.....あなたの周りには誰か居るの？」

「.....居ないけど...居たら何か都合が悪いの？」

リカは嘘をつき、城ノ内の様子を窺った。

「.....特には...ただ訊いてみただけよ...」

「...用件は？またゲームに巻き込む気？」

「...ふふ、前のはほんのお遊びよ、今度はスケールが違うわ...街の騒ぎを目にしているはず...あなた一人では対処出来ない...仲間はいくらでも呼んでもらっても結構よ...」

「...これで決着をつけるわけね...堂々と姿を現しなさい」

「...そう慌てないで、あなたをじっくり苦しめるよう色々と考えたんだから...」

「...前みたいに振り回されるのは御免だわ...早く居場所を言いなさい...！」

「...簡単には教えられない...私はエサを求める暗闇の鼠、完成されていない砦で静かに潜んでいる...待ち続けましょう、いつまでも...」

城ノ内は、急に意味不明の言葉を発し、テロ対策チームを困惑させた。

「.....！今日のあなた、調子よさそうね...」

「...何を言ってるの？」

城ノ内は予想外のリカの返答に対し、少しどよめいている様子であった。

「前に電話であなたの声を聴いた時、どうも違和感があってね...声の調子が悪かったような...風邪？」

「.....」

城ノ内は、今のリカの発言が気に入らなかったのか、黙って電話を切った。

「...彼女どうしたんでしょうか？」

「さあね...で、これからどうするの？」

リエは、険しい表情でリカと目を合わせ、彼女の発言を待った。

「.....彼女の居場所は分かりました...今すぐ向かいます...！アスカ、運転頼むわ」

「...は、はい！」

「...今の会話で分かったの？」

「ええ、騙されたと思ってついて来て下さい...！」

リエは、リカの言葉を信じて同行しようとした。

「...ちょっと待って！罠かもしれない...もし、全滅したら大変です...念のために何人か残った方がいいのでは...？」

「...そうね、油断は禁物...では指揮を務めるアヤカ、あとはユウコ、ミサト、チヒロは残って...私とアスカ、クミコはリカと一緒に行動する...いいわね？」

「...了解しました、何かあればすぐ連絡して下さい！」

こうして、リカは、仲間を引きつれて城ノ内が居ると思われる場所に向かおうとした。二人が接触することで、東京が戦場になるのは目に見えていた。

## 第五話 黒獅子燃ゆ

---

その日、広範囲でテロが起き、都内の至る場所でサイレン音が鳴り響いていた。それで緊迫した空気が伝わっていた。

公共交通機関はテロ事件が解決するまで運休となり、厳重な検問により、テロの一味が居ないか取り締まっていた。また、警官隊は毒ガス発生装置捜索に全力を注いでいた。一般市民には避難指示が出て、警官隊や自衛隊の誘導で、都心部から避難することとなった。避難誘導は難航して、以前に起きた大阪のテロ事件と比べ物にならない程、被害規模が大きかった。

テロ対策チームの一員であるリカは、テロ主犯の城ノ内の居場所が分かった様子で、仲間と一緒に現場へと向かっていた。

「……本当に犯人の居場所が分かったんですか？」

アスカは運転しながら、リカに答えを求めた。それに対し、リカは自信に満ちた顔で答えようとしていた。

「ええ…さっきの電話での会話で分かったわ…」

…簡単には教えられない…私はエサを求める暗闇の鼠、完成されていない砦で静かに潜んでいる…待ち続けましょう、いつまでも…

「これって…！」

リカは、城ノ内との会話を録音していて、重要な部分をアスカに聴かせた。リカたちを追尾しているリエとクミコ、待機しているアヤカたちも、無線で彼女の推理を聴こうとしていた。

「…気になったのは今聴かせた部分…気障に語っているけど、これは居場所を示していたのよ…」

「…暗号みたいなものですか？」

「…そうよ、ちゃんと聴けば簡単よ」

「リカさんは分かったんですね？」

「ええ、見解はこうよ、私はエサを求める暗闇の鼠...というのは地下にいることを意味している...二十年前のテロ事件のように地下でテロを起こす気よ...」

「...成程」

「次に...完成されていない砦で静かに潜んでいる...というのは特定の場所、これでさらに場所が絞られる...」

アスカたちはリカの推理に集中して、聞き分けのいい子供のように小刻みに頷いていた。

「その場所というのは？」

「...砦というのは恐らく駅のことよ、つまり駅の地下.....アヤカちゃん、都心部でまだ被害を受けていないエリアは...？」

「...え？あっはい、ちょっと待って...！」

「...お願いします！」

急にリカに訊ねられたアヤカは、すぐに報告書に目を通した。

「...えっと、今のところ千代田区と...渋谷区がまだ被害を受けていません...！」

リカはアヤカの報告を耳にして、軽く笑みを浮かべた。

「...思った通りね...奴は渋谷に居る...！」

「...渋谷ですか？指示通りにそっち方面へ向かっていますが...」

「.....完成されていない...という発言が引っ掛かってね...」

リカは、手持ちのタブレットであるものを検索した。アスカは、停車中にタブレット画面を確認した。

「...これって工事中の渋谷駅...！」

「そう...渋谷駅はリニューアルされようとして未完成...まさに完成されていない砦...間違いなくここよ...！」

「...かなり自信があるみたいですね...」

「...ええ、付け加えるなら最後の...待ち続けましょう、いつまでも...特に深い意味はないと思うけど、この世に居ない主人を待ち続ける忠犬ハチ公が連想されるわ...奴は逃げることなく、ずっと待っている...」

「...そこに戦力を集中させる気でしょうか？」

「それはどうかな？まだ何か企んでそうだけど...」

リカたちは、畏と感じながら渋谷方面へと急行した。一方、待機しているアヤカたちは、本澤課長と連絡を取り合っていた。

「...主犯が潜伏している場所が分かったのか？」

「...はい、先ほどリカ隊員の電話に主犯らしき人物からの着信がありまして...」

「...やはりリカに復讐する気か...奴らが潜伏している場所は？」

「...渋谷駅地下のようです...リカ隊員含め、計四名が現場に向かいました...」

「.....地下か...二十年前に起きたことを再現するつもりか...？このことは会議中の上層部に報告する...現場に着いても、上の指示があるまで勝手な行動をするなど伝えてくれ...」

「...了解しました！」

テロ対策チームから有力な情報を入手した本澤は、すぐさま会議室に居る警察幹部たちに内容を報告しようとした。

「.....会議中失礼します...内線で公安部の本澤課長から電話が掛かってきたのですが...テロの件でお伝えしたいことがあると...」

「...こちらにつなげ」

警視総監の許可を得て、会議室に居る警察幹部は、電話を掛けてきた本澤の報告を聴こうとしていた。

「...緊急を要することなので電話で失礼します...有力な情報を手に入れました...」

「...聴こうじゃないか」

「...先ほどテロ対策チームに主犯から連絡があったようで、渋谷駅に潜伏しているとのこと  
です...！」

「.....なぜ先に我々と交渉しない...？犯行声明もまだ送られて来てないぞ！」

本澤の報告に対して、警察幹部は納得していない様子であった。

「.....主犯は、恐らくテロ対策にあたっている隊員に恨みがあるんでしょう...以前に起きた大阪でのテロ事件を妨害され報復を考えたかと...」

「...個人的な恨みで多くの人間が振り回されているということか...何処まで馬鹿にする気だ...！  
すぐに現場にSATを出動させる！」

会議室に居る警備部部長が、苛立ちながら本澤に言葉を返した。しかし、警視総監は警備部長の意見を受け入れず、違う質問を本澤にしようとした。

「.....犯人から何か要求はないのか？」

「...今のところないようです」

「.....君たちを信じていいんだな？」

警視総監は鋭い眼差しで、新沼と本澤に気持ちを投げ掛けた。

「...何かあれば私が責任を取ります、任せては頂けないでしょうか？」

公安の責任者ではある新沼は、深々と頭を下げて警視総監に頼み込んだ。

「.....君たちが居ないとこの件が解決しないということはよく分かったが...指揮をするのは私だ...それなりに対処させてもらう...単独で行動することは許可したが、勝手な行動は控えてもらおう...ご理解頂けたかな？」

「...はい！」

「...では現場にSAT部隊を出動させる...！現場近辺に居る一般市民は、自衛隊と連携して安全な場所に避難させろ...準備が整い次第、中枢に突入する...！」

会議室の中は緊迫感が増し、警察幹部は現場の人間に身を委ねた。

一方、同じ頃、都内から離れた地域でも妙な動きはあった。場所は千葉県に位置する成田空港。空港敷地内には私鉄が通っているが、一つ廃墟と化した駅があった。その駅は、時代の流れで封鎖されていた。

コンコースはかなりの広さで、明かりがちらほら点いているが人気はなく、寂しさが漂っていた。駅構内の物はほとんど撤去されず、放置されたままであった。貼られたままの広告ポスターが賑わっていた頃の駅を物語っていた。幽霊が出てもおかしくない秘境の駅であったが、ここ最近、鼠の他にひっそりと足を踏み入れて棲みついている者がいた。謎の住人は一人や二人ではなく、集団のようであった。

駅の中心部は人気があり、覗いてみると多くの資材や機材が置かれていた。近くには複数の軍服を着た者が整列していて、リーダー格と思われる一人の男が前に立って指示をしていた。その正体は、城ノ内の仲間であった。彼らは別行動を取って、何かを企んでいるようであった。彼らは、廃墟と化した駅をアジトとして利用していた。そこは一切邪魔が入らないため、隠れ家として格好の場であった。彼らは、警察や自衛隊の無線を傍受して都内の様子を窺っていた。

待機班のリーダー格の名は、神成塔矢 三十七歳。元陸上自衛官で、大阪のテロ作戦に参加していたテロリストの一人、神成信哉の実兄である。問題児の弟と比べ、頭脳派で口数が少ないのが特徴だが、冷徹さが目立って弟より戦闘狂である。戦闘力は兄の方が断然上である。

「...SATの出動要請が出た...我々もそろそろ出掛けるとするか...存分に暴れ回れ...」

神成（兄）は淡々と指示をして、仲間はそれに従った。神成（兄）たちは、銃器を身につけて

地上に出ようとしていた。

「...！」

しかし、神成（兄）たちはある異変に気づき、足を止めた。仕掛けてあった監視カメラの映像に人影が映っていた。

「...神成さん、侵入者です！数は数えきれません...」

「...ちっ招かれざる客か...！」

神成（兄）は、焦りの表情を浮かべた。

侵入者は構わず駅構内を駆けていき、神成（兄）たちがいる場所を目指していた。侵入者の正体は、チエ率いる歌劇団メンバーであった。指揮官であるチエが先陣を切り、屈強な戦士たちは長い地下通路を抜けようとしていた。

チエ以外の主要メンバーはまず、班の二番手を務めるユズミ。

次にマサコ。彼女は、所属する歌劇団の中堅実力派スターの一人で、チエとは同期である。日々、陰からチエを支えている。歌劇団の中ではかなりの高身長で、退団した歌劇団随一の高身長を誇る、ユウコに次いで身長が高いとされる。恵まれた体格は裏稼業にも活かされ、危険区域に派遣されることが多い。チエが不在の時は、彼女が班をまとめている。

続いてユリカ。歌劇団の未来を担う実力派ホープの一人。体格はがっちりしていて強靱な肉体を持ち、舞台上で存在感を見せる。しかし、普段は大人しい方で優しい性格である。裏稼業でも活躍の場を広げ、チエたち上級生と共に犯罪組織に立ち向かっている。

次にアヤ。歌劇団のアイドル的存在で、あらゆる役をこなす。性格は素直で正義感溢れる熱血派。歌劇団に入団する前は新体操をしていて、それが活かされ、小柄な体格で驚異的な身体能力を披露している。裏の世界では優秀な密偵として活動し、変装したりして敵の極秘情報を入手している。

次にミツキ。子供の頃から舞台の仕事をしており、安定した演技力と歌唱力を兼ね揃えている中堅実力派。鋭い目つきでクールなイメージがあるが、東北出身で、プライベートで話す時に訛ることがあるため、そこにギャップがある。裏稼業では頭脳派と知られ、いかなる時も冷静に任務に対応している。

さらに若手から一人、コト。歌劇団の若手ホープの一人で、先輩であるチエに憧れており、自

分の芸名は、彼女の芸名から一字もらっている。外見は可愛らしい女性だが、声は意外に大人びていて歌唱力が優れている。裏稼業ではまだ未熟な点があり、先輩から厳しく指導されている。

ここでは紹介しきれないが、他にも注目すべき人材がたくさんいる。チエたちは舞台上で着る煌びやかな衣装を脱いで、黒衣の戦闘服を身に纏い、テロリストに立ち向かおうとした。

「...一人も逃がさんように...一気に仕留める...一網打尽や」

「...了解！！」

チエの強気な宣言で、仲間たちは身の引き締まる思いであった。長い直線の通路を超えると、テロ一味数人が待ち構えていた。

「...出迎えてくれるんか？」

「...何者だ？お前たちは...」

テロ一味の一人が、銃を構えながらチエたちに質問した。

「.....あんたらをぶっ倒しに来たと言ったらどうする？」

「...！！」

テロ一味はチエたちを警戒し、マシンガンの引き金を引こうとした。

「.....そんな震えた腕では的に命中しないよ...」

「...は.....！？」

気づけば、テロリスト一味の一人の前にマサコが立っていた。テロ一味はマサコに攻撃しようとするが、何故か体が言うことを利かず固まっていた。彼らは、完全にマサコの迫力に押されていた。

「...ブゴ！！！！！」

その時、鈍い音がしてテロ一味の一人が急に倒れ込んだ。彼は鼻血を出して、そのまま気絶した。周りのテロ一味は、一瞬のことで何が起こったか分からなかった。

「...ぼけっとしてると彼みたいになるよ～」

マサコは、淡々とテロ一味に警告した。

「...貴様、何をした！？」

テロ一味は、マサコに銃を突きつけて答えを求めた。

「...ちゃんと見れば分かる」

「.....！生きて返さんぞ！！」

テロ一味は、一斉にマサコに向けて撃とうとした。しかし、それは時すでに遅しで、彼らはまたマサコの姿を見失った。

「...だから遅いよ」

「.....！！！！」

マサコの声を目にした時、一人、二人とテロ一味が倒れていき、あっという間に全員倒されていた。彼女は体が大きい割に機敏性があり、それは常人以上である。テロ一味は引き金を引く暇もなく、プロレス技のラリアットでマサコに倒されていった。

「あんたが出るまでもないで...」

チエは、呆れ顔でマサコに語り掛けた。

「...まあいいじゃないの、奥にはわんさか居るよ、これはウォーミングアップみたいなもの...」

「...やれやれ、先進むで」

チエたちは、神成（兄）たちが居るコンコースへと進んだ。

「.....お前たち何者だ？」

神成（兄）は先頭に立って、自分の城に侵入したチエたちに訊ねた。

「...SATとは違う部隊や、もう逃げられへんで...」

「.....確か妙な連中が嗅ぎ回って、関西で計画していたテロを阻止されたと言っていたが...関係あるのか？」

「...ああ、私たちはそれに参加してないけどな、さんざんやったらしいな？」

「...実は俺も参加してなくてな...東京で待機していた...俺は馬鹿な弟のようにはいかないぞ...」

同じ頃、待機組のアヤカ、ユウコ、ミサト、チヒロは現在の仲間の動きを確認していた。

「...アヤカ、私たち以外の対策メンバーを教えてください？」

待機組の中で一番先輩のユウコが、指揮官であるアヤカに質問した。

「...えっと、私たちの他には...ミユとマギーさんが...」

「彼女たちは確か...都内担当だったよね？」

「...ええ、何日も前から別行動を取って、奴らを検査しているようですが...何かあれば連絡すると言っていました...」

「...彼女たちの班は、少数で活動するのは主流だからね...放っておいても大丈夫でしょう...一番秘密警察っぽいかも...他のメンバーは？」

「...チエさん率いる班が参加しています、潜入捜査を...」

「潜入捜査？」

「テロリストの隠れ家を突き止めたそうで、今頃、やり合っているかも...場所は郊外だそうですよ...」

「彼女の班は、大勢で動くのを得意としてたね...班によってやり方が違うから面白いけど...以上なの？」

「...ええ、今のところは...本業を関東地方で行っている者、手が空いている者から選りすぐりの人材を集めたようです、あなた方みたいなフリーのお力も頼りになります...！」

「...確かにフリーになれば行動範囲が広まって動きやすい...私らも何かしたいんだけどね...」

「...もうちょっと待ってもらえますか？リカさんたちに何か起これば出番です」

「...私たちはとっておきの切り札ってわけ？」

「...そういうことです」

アヤカは、暴れたくてムズムズしているユウコたちをどうにか説得した。

奇襲を掛けたチエ一行は、彼らの行く手を阻み勝機を確信していた。

「.....随分と大勢でお越しのようだな...どうやって嗅ぎつけた？」

神成（兄）は、疑問に思うことが多くあり、興味深くチエに訊ねた。

「専門なんでね...情報は強力な武器になる...あと、今まで培ってきた経験があればすぐに見つけられるわけや...」

「...俺たちの動きを読んでいるとでも？」

「...ええ、そうです、ここ数週間、私たちは交代でこの辺りを偵察、隠密活動を行っていました...全く気付かなかったでしょう？」

神成（兄）の質問に対し、チエの代わりにアヤが丁寧な言葉で答えた。

「...コソコソと嗅ぎ回り、袋の鼠にしようと企てたわけだな？」

その時、神成（兄）は、何故か楽しそうに笑みを浮かべた。

「...そういうことや、今から親玉を助けに行くつもりやろ？」

「...ああ、俺たちは増援だ」

「...SAT部隊が出動する情報を入手し、タイミングを計って増援で向かうわけですね？」

今度は、ユリカが神成（兄）に質問を投げ掛けた。

「...ああ」

「.....空港近辺に使用されていない古い格納庫があった...中を調べるとヘリがあった、車も数台停まってたけど、ここからだ時間が掛かるし、都内に行くためのルートは、現在封鎖されていて、検問を抜けるのは困難...だから空しかないわけや...そうやる？」

続いて、ユズミが神成（兄）を問い詰めた。

「...ああ、そうだ」

「...ヘリのカラーリングは、警察航空隊と同じでした、それはSATも使用しているヘリでもあります、おまけに停めている車の中には、SATが着用する戦闘服や備品がありましたし...あなたたちは、どさくさに紛れてSAT部隊に変装して攻めるつもりですね？」

続いて、ミツキが核心をついた。

「...ご名答、抜け目がないな、参ったと言わせたいのか？」

神成（兄）たちは観念しようとせず、強気であった。

「.....私らの任務は、テロ部隊を確保...または殲滅させること...既に格納庫近辺には、うちの仲間が武器を備えて待機している、格納庫には誰一人行かさへんで～」

チエは、淡々と神成（兄）たちに忠告した。

「...さっきも言ったはずだが、俺たちは弟が居た部隊とは違う...！悪いが進ませてもらおうぞ...！」

「...投降するなら危害は加えないつもりだったけど仕方ないね...」

マサコは、溜め息をついて一步前を出た。

チエ率いる部隊と神成（兄）率いるテロリスト一味の間に火花が散り、死闘が繰り広げられよ

うとしていた。

「.....ドババババババババババ...ドドン...ドバ...ドルルルルルルルルル.....！」

さっきまでひんやりとした空気に包まれた廃墟駅校内は、チエたちが現れたことで、銃声や爆音が鳴り響く戦場と化した。

お互い適当に散らばって、テロリストたちは辺りかまわず銃火器を乱射した。しかし、チエたちはそれに怯むことなく、銃弾の雨を駆け抜けようとした。

「...ザシャ！」

ユズミは武器に名刀、`加州 清光、を好んで使用する。その刀はかつて新撰組で名を知らしめた幕末の武士、沖田総司の愛刀の一つでもあった。時代劇に興味を持った彼女は、それがきっかけで、優れた剣術を身につけようとした。

ユズミに撃たれた弾は、全て刀で弾かれ、一発もかすることもなかった。彼らは、反撃されて華麗な刀さばきの餌食となっていた。ただ、斬撃を受けた者たちは皆、峰打ちで倒されていた。斬られたのは銃器だけであった。

「...ぐあ...！！！」

ある場所では、大勢のテロリストが悲鳴をを上げて使用されていないエスカレーターを転げ落ちていた。彼らに攻撃をしているのはマサコであった。彼女は武器を持たず、自慢の俊敏な動きで相手を翻弄して、強烈なタックルを浴びせていた。まさにその姿は野獣であった。

アヤは細身で軽い体を活かし、相手の攻撃をかわして行った。彼女は間合いを詰めて、自分の領域を作り、得意の接近戦へと持ち込んだ。彼女に敵う者は誰もいなかった。

ユリカとミツキは、正確な射撃と無駄のない動きで相手の動きを封じていた。

新人のコトには特殊な能力があり、彼女から発する声により、テロリストたちは頭を抱えて苦しんでいた。

戦況は明らかに、神成（兄）率いるテロリスト集団が不利であった。それでも神成（兄）は表情を曇らせようとせず、チエたちに挑もうとしていた。

「.....やるじゃないか、優秀だな、お前の部下たちは...」

「...うちはスパルタやからな、鍛え方が違うんや...あんたらのような即席で結成した部隊とは違う...」

「...言ってくれるな、さっきから勝った気であるようだが...まだ俺がいる、相手になってもらおうか...勇ましい御嬢さん？」

「...ええ遊び相手になるんやろな？」

お互いの仲間が争っている中、チエと神成（兄）の対決が始まろうとしていた。

「...何だ、得物は持っていないのか？」

「...色々と身につけるのは嫌いでね、邪魔になるだけや...銃に頼らずガチンコが一番や」

「...遅いな、気に入ったよ、フェアに行きたいところだが、これはゲームじゃない...俺のやり方でやらせてもらうぞ...！」

「...どうぞ、ご勝手に」

チエは少しも表情を変えず、冷めた顔で神成（兄）の発言に応じた。早速、神成（兄）は、戦闘態勢に入り、自分のタイミングで攻めようとした。

「.....ドン...ドドン...ドド...！」

先手は神成（兄）が取り、装備しているハンドガンをチエに目がけて連射した。チエはそれに対し、長い足で高く飛び上がり、神成（兄）の懐に飛び掛ろうとした。

「バゴ！！.....」

気づけば、神成（兄）はチエに頬を殴られてふらついていた。

「.....な...何だと？」

神成（兄）は、チエのあまりのスピードに驚愕していた。

「...ノロいで、おっさん」

「...このアマ！」

神成（兄）は、チエに遊ばれて体勢を立て直した。彼は弾切れのハンドガンを投げ捨て、一定の距離を取ってからある物をチエに向けて放り投げた。

「...！！」

「...ドゴゴン！！！！」

放り投げられたのは、手榴弾であった。チエは逃げ切れず、爆発に巻き込まれたようであった。その影響で歌劇団部隊とテロリストたちの戦闘は一時静まり返った。

「...チエ隊長」

若手の歌劇団隊員の中には、チエのことを心底心配する者が居た。神成（兄）はチエが吹き飛んだと思い、勝利の瞬間を味わおうとしていた。

「...はは、こうも呆気ないとはな、お前たちの隊長はたいしたことないな...」

神成（兄）は上機嫌であるが、チエの仲間たちは何故か悔しみを滲ませていなかった。

「...どうした、あまりにも呆気ないから、涙も出ないか...？」

「.....私はこんなもんで死なへんで」

「...！！？」

その時、手榴弾の爆発によって起きた白煙からチエの声がして、神成（兄）は唾然としていた。

「...私からすれば花火みたいなもんや、こんな子供だましは通用せえへんで...」

「.....そうだな、本当の勝負はこれからだ...ふざけてすまなかった...」

その時、神成（兄）に笑顔が無くなっていき、周りの戦闘は再開された。また、チエと神成（兄）の対決も再開されるわけだが、どうもチエの様子がおかしかった。

「?...どういうつもりだ？」

神成（兄）はチエに向けて攻撃を続けるが、彼女は反撃しようとせず、回避したまま後退していった。神成（兄）は、疑念を抱きながらチエについて行こうとしていた。気づけば、二人は中央広場を離れて無人駅のプラットホームへと来ていた。

「...この辺でいいやろ」

チエは、ホームの真ん中あたりで急に立ち止まった。追った神成（兄）は、攻撃を一旦止めて彼女と向かい合った。

「.....ふう、随分と走らせてくれたな」

神成（兄）は、様々な銃火器を背負いながら移動してきたため、少々疲れていた。

「...いい運動になったやろ？それにここなら邪魔が入らへん...邪魔する奴が居れば、仲間でも容赦せえへん！」

その時、チエは普段とは違う冷たい目をしていた。

「いい目だ、期待が膨らむ、そんなに好戦的とは思わなかった...歓迎するぞ」

「ごちゃごちゃ言ってないで、かかって来いや...私は気が短いねん」

「.....ふん、お望み通り全力で戦ってやる！」

神成（兄）は、手持ちの火器を構えて攻撃を再開した。彼は火力のあるグレネードランチャーを乱射し、ホームはたちまち炎に包まれ、崩壊していった。チエはそれに動じず、攻撃を避けながら隙を窺っていた。

「...そろそろ戦争ごっこも飽きたな」

チエはそう呟き、神成（兄）の前に現れた。

「...なぜ反撃しない？弾切れを狙っているのか？何かの時間稼ぎか...？」

「...まあそうやな、時間調整...みたいなもんかな...」

「時間調整？」

「.....もうじき、あんたらの部隊は全滅する、それに合わせて決着をつけようと思てな...」

「.....ここまで屈辱を受けたのは初めてだ...上官にもお前のように見下した奴は居なかった...憎くてたまらん...！普段、冷静沈着な俺でも感情に流されそうだ...」

その時の神成（兄）は目が血走っており、危険な状態であった。

「最後のチャンスや...次で仕留めろ」

チエは神成（兄）を軽く挑発して、わざと無防備となった。

「...うおおおおおおおおお！！！！」

神成（兄）は挑発に乗って、気合を入れた後、彼女に目がけて集中砲火を浴びせようとした。

「...ドゴ...ドゴ、ドゴゴゴ！」

神成（兄）の攻撃により、しばらく爆音が鳴り響き、それは中央広場に居る歌劇団部隊たちにも充分伝わっていた。仲間たちは一切助けに行こうとせず、成り行きに任せていた。

攻撃は数分続き、ホームは黒煙が立ち込めて瓦礫の山と化していた。

「...はあ、はあ...はあ...」

神成（兄）は、怒りと興奮のあまり息を切らしていた。戦闘領域は荒れ果てて、チエの安否の確認は、困難と思われたが、思ったより早く結果が出そうであった。

バズーカの砲弾を撃ち尽くした神成（兄）は、手応えがない様子で立ちすくんでいた。これは神成（兄）のような実力者でなければ感じ取られないものであった。

「...カラン」

神成（兄）は、石つぶてが転げ落ちる音を聞いた途端に顔が引きつっていた。驚くことに彼の前には無傷のチエが立っていたのであった。

「...幽霊を見るような反応やな...心配せんでも足はあるで...」

チエは、軽く冗談を言って力の差を見せつけた。

「.....お前は何だ？勝てる気がしない...」

「...恥じることはない、私に勝つ相手を探す方が大変や...」

「...お前の言った通り、勝負は決まっていたんだな...そう思うと余計に腹が立つ...」

「...負けを認めるやろ？」

「.....いいや、もう一度チャンスをくれ、最後に抵抗したい...」

「.....分かった」

チエは、神成（兄）の最後の頼みを引き受けた。彼は、上着を脱いで愛用しているアーミーナイフを抜いた。

「...行くぞ」

神成（兄）はそっと囁き、白兵戦で決着をつけようとしていた。チエは、紙一重で神成（兄）の攻撃を避けていた。彼の攻撃パターンは全て読まれて、無駄に体力を消耗しているだけであった。

「...ひい...ふう...はあ、俺ばかりに激しい運動をさせるなど言っているだろう...ちよつとは攻撃しろ...！」

一旦チエから離れた神成（兄）は、疲れた体で彼女の反撃を待ち望んだ。

「.....じゃあ、ちよつとだけ」

チエが呟いた後、神成（兄）はまた驚愕することとなった。

「...！！」

気づけば、チエは神成（兄）の目の前に居た。

「...パギン！」

その時、神成（兄）のナイフの刃が折れた。チエは、素手でナイフの刃を折ってしまったのであった。

「...何をした？」

神成（兄）が質問すると、チエの手は蒸気が発生するほど熱を帯びて、赤く発光していた。正確に言うと、熱を帯びているのは彼女が身につけている特殊な手袋であった。

「獄炎を召喚する手袋 インフェルノ・グローブ」、チエ専用の最強の武器であった。特殊な素材により、摩擦熱を加えることで火を起こすことが可能である。最近では改良され、放たれた火のエネルギーを吸収することが出来て、爆薬や火器の火力、攻撃力を半分以上にすることも可能で吸収したエネルギーを跳ね返すことも出来る。

「...あんたから攻撃を受けたことで、私は強くなる一方や、吸収したこの炎...返してあげてもいいけど...どうする？」

「.....！！」

神成（兄）は、状況が上手く飲み込めなかったが、チエの狂気に満ちた表情と紅く染まった手を見て、今までに味わったことがない恐怖を味わっていた。

それから数十分後、銃声や爆音が鳴り止み、チエ率いる歌劇団部隊により、テロ増援部隊は沈黙した。彼女たちの完全勝利であった。

チエも仲間たちの前に姿を現し、気を失った神成（兄）を背負っていた。

「...片付いたようだね」

マサコが、笑みを浮かべながらチエに話し掛けた。

「...やっぱり期待外れやったわ」

「...なんか激しくやってみたいけど、彼の怪我はたいしたことなさそうね...？」

「...攻撃しようとしたら、急に気絶しちゃってさ～案外気が小さい男やな～」

「...気絶してくれて正解だったかも...本気になったあんたは加減を知らないからね～」

チエは、戦闘不能の神成（兄）を若手隊員に預けてから無線で連絡を取ろうとした。

「.....こちら `黒獅子、アジトを制圧し、対象は沈黙、オールクリアや...」

「...ご苦労様でした、お蔭で厄介ごとが減りました...感謝します！」

「...お互い様やろ？あんたから貰ったネタでアジトの場所が分かったんやから...」

「...またお願いすることがあるかもしれません、すぐに戻れますか？」

「...人使いが荒い後輩やな」

「...すみません、他に頼れる人が居ないもんで...先輩...」

「...分かった、今度何か奢ってもらうで」

「...了解しました、ではお待ちしております」

チエと無線で会話していたのは、ミユであった。彼女は神成（兄）たちのアジトを突き止めて、チエたちに侵攻を防ぐよう依頼していた。

「...そっちは上手くいったみたいだね～」

ミユは現在、NSX車内の助手席に座っており、運転を務めるのは、先輩のマギーであった。

「予定通りに進みそうですね、そろそろ次に移りましょうか...？」

「...そうね、リカたちの動きが気になる！」

ミユたちは、リカたちと別行動を取って、テロ関連の捜査をしていた。

一方、ミユたちが気にかけているリカは、城ノ内が潜伏していると思われる渋谷駅に到着し、仲間と共に様子を窺っていた。決戦はまもなくであった。

## 第六話 反逆者の巣

---

渋谷駅開発区域

リカたちは、城ノ内が潜伏していると思われる区域に到着したが、どうも揉めている様子であった。

「...リカさん、まだSATがまだ到着していません...！命令があるまで動くとまずいですよ！」

アスカは、勝手な行動を取ろうとするリカにあたふたしていた。

「待つてられないわ、あなたたちは着いて来なくていい...私一人で行くから...」

「...何、馬鹿なこと言ってるんですか！リエさんからも何か言って下さいよ！」

「...うーん、フリーの私とあなたたちとは立場が違うからね...命令を無視すれば、公安の責任者が責められることになるし...」

「...モタモタしてられませんよ、奴らはまだ何か企んでいるに違いありません...！罨だということは承知に上です...こちらから攻めないで...！」

リカは、テロ撲滅に闘志を燃やし、リエに反論した。

「...我慢して下さい！もう少しでSATが到着するんで...お願いします」

「.....」

アスカが必死にリカを止めようとするが、その声は彼女に届いていない様子であった。冷静さを失ったリカは、とんでもない行動に出ようとした。

「...何を！？」

リカは、涼しい顔でアスカに銃を突きつけた。

「.....邪魔するなら容赦しないわよ...」

「...何をやっているか分かっているんですか？」

リカはアスカの言葉に応答せず、険しい表情で銃を構えていた。

「...！」

すると、アスカも銃を抜き、リカに突きつけた。

「.....やろうっていうの？」

「...二人とも止めて下さい！こんな時に仲間割れしてどうするんですか！！」

一番後輩のクミコが、リカたちの暴走を止めようと仲裁に入ろうとした。リエは黙って成り行きに任せようとした。

「.....！！！」

その時、引き金を引こうとしたのはリカであった。アスカは出遅れて反撃出来ずにいた。

「...ドドン！！」

銃声が駅近辺に響き、しばし静寂な時間が流れていったが、それは予期せぬ結果であった。

「...ドガガガガガ」

「...え？」

その時、別に銃声が聴こえ、クミコは愕然とした。

リカが撃った弾は、アスカに命中していなかった。確認するとアスカの背後に一人倒れていた。その人物はテロリストの一味であった。彼はリカたちを狙っていたが、リカに先手を取られて返り討ちに遭っていた。

「.....命令を待っていたら皆やられるよ」

リカはそう言い残して、銃を静かに下ろした。アスカは納得している様子であった。

「...え？まさか今までの芝居？知ってたんですか？」

心がどよめくクミコに対して、他の三人はにやけていた。

「...敵を欺く前にまず味方からと言いますが、気づいてましたか？」

「...当たり前よ、私を誰だと思ってるの？」

リエは芝居だと気づいており、わざと黙っていたのであった。勿論、アスカも自然とリカの芝居に参加していた。

「...え～気づいていないの私だけ？」

クミコは、ショックを受けて拗ねていた。

「...はは、ごめんね～でも味方に騙されているのが居れば、相手も油断するでしょう」

「私がりかさんに銃を向けるわけないじゃん～」

「...そりゃそうですけど、目が本気だったから...」

「...芝居は私たちの専売特許、裏稼業でも活かさないかね～」

「...勉強になりました」

リカは、クミコの肩を軽く叩き、元気づけた。

「...さて、もう芝居する必要ないわ、相手が待っていている、とっとと行きましょうか...？」

リエの意見にリカたちは強く頷いた。彼女たちは、地下につながる入り口を探し当てて侵入しようとした。地下は殺気が満ちており、多くの獣が潜んでいた。

一方、警視庁では新しい動きがあるようであった。テロ対策本部が設置された会議室内は突然のことに騒然としていた。それは、本庁の通信司令本部からの緊急連絡であった。

「...何？テロリストがここに！？」

「...はい、無断で通信が入りました...総監たちと話したいと...！」

警察幹部のほとんどは、悪戯ではないかと半信半疑であったが、警視総監は信じてい

る様子であった。

「.....こっちにつなげられるか？話がしたい...！」

「総監！」

警察幹部数人は、警視総監の言動に驚愕していた。

「...今はどんな些細な情報でも聞き入れたい...悪戯でここと連絡を取り合う愚か者など居ないだろう...」

「...総監の命なら仕方ありませんな...」

警察幹部たちは、仕方なく警視総監に従おうとした。通信司令部は、すぐさま会議室にテロリストと名乗る者の声を送った。

「.....お待たせして申し訳ない、私が警視総監だ、あなたはテロリストの一味かね？」

「.....ザ...ザ...はい、そうです...ザ...無断で連絡させて頂きました...用件を聞いてもらえますか？」

テロリストと名乗る人物は、一つも横柄な態度を取らず、犯罪者と思えない程、上品に警視総監に語り掛けた。

「...聴いてもかまわんが、名は名乗れないか？」

「ザザ...ええ、生憎答えられません...ザ...呼びたければ...ザ... ´ルージュ、お願いします...」

「.....分かった、それでは用件を聞こう、ルージュ...」

「...ザ...ザ...ありがとうございます...充分ご存知だと思うが...ザザ...現在、都内は我々が起こしたテロで錯乱状態になっている...犯行声明を出さずに...ザザ...騒ぎを起こしたことをお詫びしたい...ザザ」

「.....要求は？君たちの目的は何だ？」

警察幹部の一人が ´ルージュ、に質問をした。

「.....ザ...政府への報復と...大それたことではありません...ザザ...」

「...当然だ、君たちに何をしたというのだ？」

「ザザ...ええ、あなた方には...ザザ...分からないことです...個人的な理由ですよ...ザザ...」

「...君たちのつまらない用で多くの市民を巻き込むな...どうすれば今の騒ぎが収まる？」

また一人、警察幹部が、`ルージュ、に質問した。

「.....私の言った通りにしてくれれば、テロ行為を止めますザザ...よろしいですか、総監殿...? ...ザザ...ザ」

「.....ああ、要求を聞こう」

その時の警視総監には、余計な迷いはなかった。

「...ザザ...それでは十五億円、我々に支払ってもらいましょうか...ザザ」

「何を馬鹿な...!!」

警察幹部たちは、`ルージュ、が言った金額を耳にしてざわめいていた。

「...身代金ということか？」

「...ええ、人質は...ザザ...都内に居る...全ての間人.....ザザ...」

`ルージュ、は、徐々に威圧的な態度で警察幹部たちに接した。

「...とても用意出来る金額ではない！悪いがそんな要求は呑めない...！」

「ザ...政府から...ザザ...すれば、はした金...かき集めることが出来るでしょう?...ザザ...ザ...すぐには言いません...制限時間は今から二時間...ザザ...指定した場所に...ザ...金を持ってきて下さい...」

「.....もし、払わず制限時間が過ぎたらどうなる？」

「ザ...東京の街が毒ガスに包まれ...ザザ...機能しなくなります...ザ...犠牲者は想像以上の...数になるでしょう...ザザ.....あと、あなた方が属している...ザザ...組織の秘密が明かされます...ザザ」

「...何だと...！？一体どういう情報だ！？」

ミルージュ、は明かす情報を語らず、あざ笑っていた。

室内にいる警察幹部は顔色を悪くして、声を出さず、しばらく頭を上げようとしなかった。

「...ゆっくり考えている時間は...ザザ...ありませんよ...ザ...ザザ...ちゃんと約束を守れば人質の命は助かる...今、決めてもらいましょう...ザ」

「.....分かった、要求を呑もう！」

「...総監！！」

警視総監は苦渋の決断でミルージュ、に返事をした。

「ザ...では丸の内にあるオフィスビル〇〇の...ザザ...屋上で待ち合わせです...時間厳守でお願いします...ザザ...」

「...本当に金を払えば、身を引いてくれるのだろうか...？」

「ええ、ザザ...勿論、ザ...約束は守ります、陰で余計なことを企んでいけば...ザ...どうなるか...お分かりでしょう？我々を捕まえようなどと考えないことだ...ザ...部下に威勢がいいのが居るようだが...ザザ...」

「...何のことだ？」

「.....すみません、ザザ...つい、どうでもいいことを.....ザ...それでは二時間後楽しみにしています.....ザ...もうこちらにお邪魔はしないと思いますのでザザ.....ザ...お別れです...さようなら...ザザ」

ミルージュ、からの通信は切られ、警察幹部たちは険しい表情を浮かべて頭を抱えていた。

「.....十五億円なんて大金、すぐに用意出来るわけがない...我々の力ではとても...」

「官邸に居る連中はどういう顔をするかな...? 払うとは思えんが...」

警察幹部たちは好き放題言い合って、場が荒れる一方であった。

「...総監、どうされますか？」

「...約束したからには用意しないとイケない...奴らは本気だ...国を挙げて対処しなければ...総理と話し合ってみよう...」

「...了解しました」

「.....ところで今のゝルージュ、と名乗る人物はどうやって...何処からここにつないだんだ...? 分かるかね？」

警察幹部の一人が、通信司令部の責任者に訊ねた。

「.....調査しましたが、逆探知は失敗です...妨害電波により、特定が出来ません...」

「...そういえば、話している途中、頻繁に雑音が入って聞き取りづらかったな...」

「.....恐らく発信場所は電波が届きにくい地域か、もしくは移動中なのでは...? 元自衛官が多いから無線機器に関して専門知識があるはず...どうにでも出来ます...」

その時、長く黙っていた公安部部長の新沼が口を開いた。

「...今、話していた人物は都内に居ないという可能性は？」

「どうでしょうか? 相手の情報がはっきりしないので...今、話した人物がどういった立場の人間か分かりませんし...」

「...主犯とされている自衛官では？」

「何か我々の組織に関しての、秘密を知っているみたいだったが...」

新沼は、警察幹部たちからの質問が集中して、困り果てていた。

「.....ちょっと待って下さい、そんないつぺんに答えられませんよ...落ち着いて話し合いましょうよ...」

「...そうだ、彼を困らすな...と言いたいところだが、今は君が頼りだ...何か手はないか？」

警視總監は他の警察幹部同様、新沼に救いの手を求めた。そんな時、会議室にある情報が舞い込んできた。

「...すみません、今よろしいでしょうか？」

その時、オペレーター担当の職員から通信が入った。

「...どうした？」

「...公安部の本澤課長から緊急で伝えたいことがあると、内線が入ったんですが...」

「...つないでくれ」

会議室内の人間は、耳を澄まして本澤の報告を聴こうとした。

「...またお邪魔して申し訳ありません、どうしてもお伝えしなければいけないことがありまして...！」

本澤は、一度目に報告した時よりも感情がこもっていて、深刻そうに話しだした。

「...何事だ？」

「...現在、渋谷駅地下で公安部隊とテロリスト集団が交戦中です...！」

「...何だと？SAT部隊が到着するまで動くなと言ったはずだぞ！どういうことだ！新沼部長？」

新沼は黙ったままで、警視總監は新沼たちに裏切られた気分であった。

「...お言葉ですが、相手は凶悪な犯罪者集団です...！こっちの常識が通用しない...ゆっくりと考えている暇はありません、もう少し的確なご判断をお願いします...！」

「...我々に説教する気か!？」

本澤の反論が、会議室にいる警察幹部たちの逆鱗に触れ、険悪な空気になろうとしていた。ただ、新沼だけは様子が違い、急に思い立って席を外そうとした。

「何処へ行く?新沼!!」

警視総監の怒号が響き、新沼は正面を向いて立ち止まった。

「.....すみませんが、私はここで失礼します...どうやらこの場所は私に相応しくないようだ...」

「...新沼君」

「...これ以上問題が起きないように全力を尽くします...身代金はどうかご用意してもらえますか...我々を愚弄した連中を引きずり出してみせましょう...それでは」

その時の新沼は鬼気迫るものがあり、周りの者は震えあがり、反論することが出来ずにいた。新沼は会議室を後にして、ある場所に向かった。その時の彼は生き生きとして足を進めた。

都内近辺上空、謎の三機のヘリ編隊が優雅に飛行しており、地上の様子を監視しているかのようにも見えた。そのヘリは、警察航空隊と同型機でSAT部隊も使用する物であったが、搭乗しているのは警察関係者でもSAT隊員でもなかった。

「...これで手筈は整った、ラストステージも近いな...」

搭乗していたのは、例のテロリスト集団であった。彼らは盗んだヘリをSAT部隊専用のヘリに似せるよう改良していた。主犯の一人である緋岡は、操縦を担当しており、さっきまで警察幹部と交渉していた「ルージュ」の正体は彼であった。

「...緋岡さん、ちょっと気になることが...」

その時、テロリストの一人が深刻そうに緋岡に話し掛けた。

「どうした?」

「...神成(兄)さん率いる部隊との交信が途絶えました...全く応答がありません...!」

「...何かトラブルか？彼らは俺たちの後に出る予定だっただろ...？」

「...ええ、無事に出たか確認を取ろうとしたんですが反応なしです...原因は分かりません...！」

「.....例の...公安の連中の仕業だとしたら...厄介なのは奴らだけだ...」

「...どうしますか？」

「...確認のしようがない、引き返すわけにはいかんし.....だが、大体想像がつく...恐らく、神成（兄）たちはやられた...」

「...そんな！」

「...相手は思った以上に手強い...！増援部隊は期待出来ない...我々だけでやるしかないようだな...」

「...本隊に知らせますか？」

「...そうだな、俺が彼女に話そう...」

テロリストを乗せたヘリは、都内中心部を目指して飛んでいた。

渋谷駅開発区域 地下

「.....ドガガガ...ドド...ドン...ドバ...」

駅地下では、銃声が長時間鳴り響いていた。そこでは単独で行動したりカたちとテロリスト集団の攻防戦が繰り広げられているのであった。

「...かなりの数ね、どうやらここに本隊が...！」

リエは、刃先が細い西洋風の剣と小銃を巧みに操り、テロリストを次々と倒して行った。

「...やっぱり四人だけで攻めるのは無茶だったのでは...！」

「...何、弱気なこと言ってんの...？ここまで来たら覚悟を決めなさい...！」

クミコはアスカに叱られながら、装飾銃で応戦していた。テロ集団は、アスカとクミコの射撃に敵わず、後ずさりして隙を窺う者がいた。

「...雑魚に用はない...頭は何処？」

リカは、攻撃しながら城ノ内を探していた。

「リカの言う通り、雑魚でもこう多いと厄介ね...こいつらにばかり構ってられない...例の毒ガスが仕掛けられているかもしれないし...」

「...奥の方に居るんでしょうが...中は開発中で迷路みたいですし、目標を探すのは手間ですよ...」

リカたちは、戦いながら色々と策を練っていた。そして、リエが口を開いた。

「...まずこのしつこい連中たちをどうにかしましょう...リカ、ここは任せて」

「...すみません、でも.....」

「あなたは自分の標的だけを狙えばいい...私たちは簡単にやられないわ」

「...ここを切り抜ける手立てはあるんですか？」

「これとってないわ...応援が来るのを期待したいけど...」

リカは、リエたちの無事を祈って先に進もうとした。

場所は変わり、警視庁 公安部部長室。

新沼は、張り詰めた会議室を強引に抜け出して自分の巣へと戻っていた。彼は自分の椅子に座り、開放感をじっくりと味わっていた。室内には課長の本澤も居た。

「...やはりここは居心地がいいな、あんなむさ苦しい場所では頭が働かん...部下の動きも分からんしな...それにしても、言葉に気を付けた方がいいぞ...気が合わない連中だが一応、各部署のトップだ...後で一緒に謝りに行ってやる...」

「...申し訳ありません、つい、我を忘れていました...以後気を付けます」

新沼は本澤に注意するが、本気ではなかった。以前にも幹部に失言したのか、対応に慣れている様子であった。

「...これでまた予算が削られるな、やれやれ未来は暗いままだ...」

「...そうとも限りませんよ、今回の事件を解決すれば光が見えてくるかもしれません...彼女たちを信じましょう...」

「そうだな...状況を知りたい、対策チームは交戦中のことだが...」

「...はい、敵の数は多く、苦戦しているようです...」

「...じき、SAT部隊が到着する...すぐ突入させるだろう...我々だけの手柄になるのが気に食わないからな...他には手は打ってあるのか？」

「...先ほど増援部隊のアジトを抑えたと連絡が入りました...現在のところ、戦力は渋谷駅地下に集中しているようで...」

「...毒ガスもそこに？」

「...まだ不明です、奴らはまだ何か企んでいる恐れが...警戒を強めなければ...」

「...我々の戦力も無限ではない、今こそ団結すべきだと思うが.....難しいかな？」

「...会議室の連中を説得しますか？」

「...ああ、専門だから任せておけ、問題はまだあるしな...なぜ今になって身代金を...? どうも動きが読めない...」

「...それに関しても探らせませす、そろそろ最終段階に入ろうとしているのでは？」

「...だとしたら急がねば...取り返しのつかないうちに...!」

新沼たちは現場に居る部下のことを信じ、吉報を待っていた。

渋谷駅地下、リカは、リエたちの支援で強行突破しようとしていた。

「...それじゃあ行くよ！」

リエの掛け声でフォーメーションを組み、アスカとクミコは手榴弾を二、三個持ち、それを遠くに放り投げた。

「ドガ...ドガガ...ドン...！！」

テロリストたちは爆発に巻き込まれ、多数が戦闘不能になった。リカはその隙に全力で疾走した。テロリストたちは怯まず、立ち向かおうとしたが、歌劇団部隊は次なる手段に出ようとした。

「...！？」

リエはある物を手に持っていたが、それは手榴弾ではなかった。彼女は、それを手榴弾と同じように放り投げた。

「...ピカッ！！」

リエが放り投げた物は閃光弾で、地下の闇の世界をまばゆい光で包もうとした。それは人工的な太陽のようであった。テロリストたちはそれで目がくらみ、動きを封じられた。リカたちはサングラスを準備していたため、何も問題なく攻め続けた。

「...よし」

リカだけ奥へと進み、彼女は残った仲間たちに向けて親指を立てた。リエたちは、テロリストを沈黙させることに全力を注いだ。

地下の奥底、その場所は仄暗い空間であった。そんな場所に高性能無線機があり、一人、誰かと会話していた。

「.....思い通りにいかないのは仕方ないわ...全てうまくいくとは思ってない...まだ作戦に支障はないでしょう？」

「ザ...ああ、問題はない、このまま続けるが...そっちは大丈夫なのか？ザ...」

城ノ内と緋岡は、無線で連絡を取り合っていた。

「...相手の数はたかが知れてる、袋の鼠よ...すぐに片がつくわ」

「...それならいいが、リベンジしたい奴がいるんだろ？」

「...ええ、彼女を甚振りたくて体が疼くわ」

「ザ...本当にこれで最後だ、次は確実にない...ザ...悔いは残すな、思いっきりやれ...！」

「...そうさせてもらうわ、色々と世話になったわね...」

城ノ内は緋岡の言葉に対して、静かに微笑み、礼を告げた。

「ザ...時間がくれば、また連絡する...それまで死んでないことを祈っている...ザザ」

「...期待しないで.....！！！」

「...？...ザザ.....どうした？」

「...鼠一匹、紛れ込んできたみたい」

「ザ...そうか、退治の邪魔に...なるようだから失礼するよ...ザザ」

「...それじゃあまた後で」

城ノ内は自分に近づいて来る気配に気づき、緋岡との通信を切った。城ノ内は、リカの気配をしっかりと感じ取っていた。リカは城ノ内の危険な香りに吸い寄せられ、ひたすら走り回っていた。

## 第七話 狂戦士の苦悩

---

警視庁関係者は、テロリストに破額の身代金を要求され、払うか払わないかで口論を続けていた。

「...もう約束の時間まで一時間を切った...全く話がまとまらないじゃないか...！」

「...一応お金は集めていますが...さすがに要求された金額には届きません...」

「上の方だけ本物の札束を積んで、あとは新聞紙や紙の束で誤魔化せばいい...」

「今時、そんな子供だましが通じると思っているのか...？主導権はあちらが握っている...ばれれば一巻の終わりだ...！」

「...じゃあどうすればいいんだ！！」

警察幹部たちは意見がまとまらず、苛立ちが頂点に達していた。しかし、そんな時、導きの声が彼らに届こうとしていた。

「.....何度も申し訳ありません、新沼部長から内線が入っているんですが...」

「...は？新沼から...？」

警察幹部たちは新沼の名を耳にすると、表情が一変して一気に静かな空間が漂った。

「...どういたしますか？」

「.....つないでもらえるか？」

警視総監は、新沼の内線の応答を許可した。

「.....お邪魔してすみません、身代金の件はどういった状況ですか？」

「.....解決策の糸口が見つからない...糸が絡む一方だ...無駄な時間を過ごしている...そっちは何か動きがあったか？」

「...我々の部隊は、渋谷駅地下での交戦を継続中です...相手の数が多いため、苦戦を強いられて

いますが...」

「...大丈夫なのか？SATを出動させたはずだが...まだ着かないのか？」

「...どうにか持たせます、この先のことは我々に任せて頂けませんか？」

「...何？」

「...身代金の件も任せて頂きたい、そろそろ決着をつけなければいけません...」

「...決着って...テロ行為を止める策があるのか？」

「...ええ、じき、解決させることをお約束します...！」

警察幹部たちは新沼の宣言に決意が揺らぎそうになったが、特にこれといった策がないため、彼を信じようとした。

「...分かった、今回ばかりは従おう、どうすればいい...？」

「.....すでにいくつか手は打ってあります...お金は集まったんですか？」

「.....至急で集めさせているが、とても十五億は無理だ...」

「...それで結構です、集められた金額で交渉しましょう...とはいっても、集めたお金はちゃんと返って来るのでご心配なく...」

「...かなり自信があるようだが...これで本当に全て片付くんだな？」

「...ええ、必ずテロを阻止して犯人を挙げます...！」

新沼は、全ての責任を背負う気持ちで最高責任者である総監に熱意を伝えた。公安は大きく動こうとしていた。

同じ頃、渋谷駅地下開発区では長く銃声や爆音が鳴り響いていた。テロ集団に応戦しているリエ、アスカ、クミコは勢力に押されつつあり、防戦一方であった。

一方、リカはテロの主犯格である城ノ内と接触しようと、地下通路を突き進んでいた。

「...ドン...ツドン！」

リカは、待ち伏せしていたテロ部隊と応戦しつつ、城ノ内を捜し回った。

「...彼女は...あんたのボスは何処？」

リカは、倒したテロリストに城ノ内の居所を訊いた。

「.....奥の...ホームで.....あんたを待っている...」

「...そう、ありがとう」

「.....なあ...この感じは...これが...死ぬってことなのか？」

倒されたテロリストは、立ち上がろうとするリカの上着を掴んで質問した。

「.....心配いらないわ、撃たれたところを見てください、ただの麻酔弾よ」

テロリストはリカの返答を聞き、安心して眠りについた。

テロ部隊を全滅させたりカは、城ノ内が待つホームへと向かった。そのホームはまだ未完成で、テロの騒ぎで作業員は避難して、作業するための機材や重機が置かれたままであった。リカは不気味なほど静かなホームに足を踏み入れた。彼女は慎重に一步一步進んで行き、城ノ内の気を探った。

「...！！」

その時、リカは、あることに気づいて咄嗟に身を引いた。

「...ドガガガガガガ！」

リカは奇襲を受けて、回避しつつ反撃の時を窺った。乱射しているのは城ノ内で、物陰から愛用している64式小銃でリカを狙撃していた。二人の撃ちあいは二、三分続き、ひとまず銃声は止んだ。リカたちはお互い得物を下げて姿を現そうとしていた。

「...！！」

リカは城ノ内の姿を見て、驚愕していた。

「...久しぶりだね、待ちかねたわ」

「...あなた、だいぶ変わったわね、まるで別人みたい」

「...そうでしょ、色々とあってね」

城ノ内の姿を見ると、体は痩せ細り、髪の色は純白といえるほど白く、年齢より大幅に老け込んでいて、リカが驚くのも無理はなかった。薄暗い地下の空間ではつきり姿が見えなくても、変わり果てた姿は十分に伝わっていた。

「...例の増強剤のせいね...副作用でそうなったのね？」

「...ええ、これでもましな方よ、本来の姿を見ればもっと驚くわ、体に力が入らず、とても歩ける状態じゃなかった...もう植物人間に近かった...」

「...どうして回復を...? 解毒剤があったの？」

城ノ内は、リカの質問に対して軽く笑みを浮かべた。

「...ふ、そんなものは存在しないわ、開発者曰く、薬の効力が強すぎて、それに打ち勝つ薬が作れないそうよ...開発者がそういうんじゃないことだけど...」

「...ではどうやって？」

「.....効力を維持するには効き目が強い薬に頼るしかない...私はそれに全てを賭けた...投与されるとすぐ死にかけたわ...一晩中、もがき苦しみ、死線を彷徨った...その結果、体力や筋力が以前と同じくらいまで回復した...もう常人以上の力を出せないけどね...でもこれで充分よ...」

「...そこまでして何の意味があるの？」

「...私にも分からないわ、進んできた道は誤っていると分かっていたけど、どうしてここまで自分を追い詰めたのか.....ただ、きっかけがあるとすれば...あなたが原因よ...」

「...え、私？」

「...あなたと接するとなんか通じるものがあったね...魂が抜けた私に衝動が走ったわ...あなたは何か特殊な力が備わっている...」

「私はそんな特別な人間じゃないわ」

城ノ内は、リカの返答に対して見透かした表情を浮かべた。

「...とぼけても無駄よ、あなたのことは調べさせてもらった...」

「え？」

リカは、城ノ内の発言に対し、思わず口が開いたままであった。

「...以前も話したと思うけど、警察のネットワークからあなたの秘密情報を入手してね...もう所属している劇団を退団するようね、ファンは、勿論、あなたがこんな仕事をしているなんて知らないわけでしょ...？」

城ノ内は、専用のタブレット端末を操作して、不正で入手した個人データをリカに見せた。

「...また私を脅しているの？」

リカは、城ノ内の発言で少々動揺していた。

「かなり触れてはいけないコードのようね、あなたや仲間の裏の顔がばれたら、警察組織と劇団が大ダメージを受ける...あなたみたいな綺麗な女性がかんりの重荷を背負っている...そう思うと私の件なんてちっぽけな物ね」

「...そんなことないわ、あなたもかんりの重荷を背負っている...同じ女性として同情するわ...」

「そんな慰めは要らないわ、私はあなたのように華やかな世界に立てないわ、今まで暗い世界を這い蹲って生きてきた...住む世界が違いすぎるわ」

「...華やかな世界も楽じゃないわ、裏稼業より辛いことがあった...数えきれないくらい挫折した...私もあなたのようになっていたかもしれない...」

「.....」

その時、城ノ内は、リカの発言に反論せず黙って聞いていた。

「...ただ、私はあなたが持っていない物を持っている...！」

「何よ、それは？」

「信じることと信頼できる人間よ、今までの話を聞いていると、あなたはそれらが大きく欠けている」

「...何を言うかと思えばそういうこと？あなたには分からないでしょう？今までどれだけの人間に裏切られてきたか...！信頼しなくても仲間は集まるわ...！」

リカは一步も退かず、城ノ内に反論し続けようとした。

「あなたに集まった仲間は、本当の仲間とは言えないわ...単に考えが一致した者が自分のために動いているだけ...心が通ってない...上辺だけの付き合いだということがよく分かる...」

「戯言ね、一戦目は負けを認めるけど、今回は私たちの勝ちが確定よ...！」

「...？」

すると、城ノ内は、ある映像を表示させてリカに見せた。画面を確認するとカウントが表示されていた。同時に設置された大型モニターにもカウントが表示された。

「...このカウントが終われば、ある場所で毒ガス装置が作動する...今までのとは比べ物にならない程の威力があるわ...もうどうすることも出来ない...東京が死の街になるのも時間の問題...残念だったわね」

「...やはり罠だったのね、ここに毒ガス装置はなく、私たちが装置から遠ざけるためにここに呼び寄せた...！」

「...ご名答～罠と分かっているながら来てくれて嬉しいわ...あなたはずっと私と遊んでくれたらいいのよ、説教もいくらでも聞くわよ」

「計画通りに進んで嬉しそうね...」

「はっきり言ってもうテロのことはどうでもいいわ...もう一度あなたと闘いたかった...ここなら

誰にも邪魔されない...思い存分闘わせてもらうわ...！」

「その興奮している状態は、薬の影響じゃなさそうね、その喧嘩買ったわ、心行くまで正々堂々と勝負しましょう...！」

リカは、問題の毒ガスを気にしつつ、城ノ内との最後の勝負に挑もうとしていた。

「...武器の使用禁止...小細工はなし、どちらかが降参するまで戦い続ける正真正銘のガチンコ勝負よ...何か問題ある？」

「いいえ、とっとと始めましょう」

「さすがに余裕がないようね、早く勝負が決まればいいわね」

リカは苛立っていて、城ノ内の冗談や挑発にいちいち対応する暇はなかった。

リカと城ノ内は、お互い得物を放り投げて丸腰になった。城ノ内は、上着を脱ぎ捨てたことでさらに体の線の細さが目立った。城ノ内は無残な姿であったが、リカはそれに動じず、真正面から立ち向かおうとした。二人は呼吸を整えて、獲物を狙う獣のような目つきで睨み合った。その瞬間、身の毛がよだつほどの空気が漂い、死闘が始まろうとしていた。

「...！」

先手は城ノ内がとり、彼女の鉄拳が空気を抉った。リカはすかさず攻撃を回避し、反撃に出ようとした。

「...バゴ！」

リカの強烈な膝蹴りが、城ノ内の腹部に命中したかと思われたが、防御が間に合い、ダメージが半減した。二人は一旦離れて様子を窺った。次はリカが攻撃を仕掛けようとして、城ノ内の懐に飛び込んだ。

「バギャ...ボゴ...バゴゴゴゴゴ...」

城ノ内は、リカの得意としている華麗なる蹴り技を受け、反撃する時がなかった。

「.....ふ」

城ノ内は防御に徹し、悪戦苦闘しているが、何故か笑みを浮かべていた。

「...！」

ずっとリカの攻撃を受け続けている城ノ内であったが、体勢は一切崩れることはなく、彼女の体はまさに鉄壁であった。リカは、無駄に体力を消耗しないためにまた攻撃を止めて距離を取った。

「...なぜ彼女は倒れないの？体力、戦闘力は以前よりかなり落ちているはず...ましてや常人以上の力は感じられない...でも何故か強く見える...！」

リカは、今の城ノ内の状態を不思議に思い、首を傾げた。

「...どうしたの？華麗なるスパイさん...」

「.....あなたは一体？」

「...何か考え事？余計なことを考える時間はないんじゃないの？来ないのならこっちから行くわよ！」

城ノ内は、困惑しているリカに容赦なく攻めようとした。原因は不明だが、今の城ノ内は大阪で戦った時よりも脅威であった。リカの戦意は徐々に無くなっていき、喪失しかけていた。毒ガス装置が作動する時間が迫ってきており、リカには絶望感が満ちていた。

一方、テロ対策チームの待機班、ユウコ、アヤカ、ミサト、チヒロはバンでリカたちが居る渋谷駅へと向かおうとしていた。

「リカさんたちは、かなり手間取っているようですね...早く助けに行ってください...」

「...SAT部隊はどうしたの？もう出動しているはずでしょう...？」

ユウコは、アヤカに疑問を投げ掛けた。

「...現在のところ、SAT部隊は現場に到着していないようです、だからこうして私たちが行くしかない...」

「随分と協力的じゃないわね、私たちを見捨てたのも同然だわ」

「...秘密警察は評判が悪いからな～」

ミサトとチヒロも現在の事態に納得していない様子であった。

「...そういうわけじゃないと思いますが、何か考えがあるのでは...？」

「.....ピーピー！」

「...！」

その時、車内の無線に反応があり、アヤカは即座に応答した。送信者は、司令官である本澤課長であった。

「どうかされましたか？」

「...今、お前たちは何処に居る？」

「...え？渋谷付近ですが...仲間の応援に行くところです...」

「...振り回してすまないが、進路変更だ」

「?...それはどういうことでしょうか？」

「...応援に行く必要が無くなったのだ、詳しいことは後で話す...指定された場所に急行してくれ」

「.....了解しました」

アヤカたちは、突然の指令に啞然とした。リカたちが居る場所まで目と鼻の先であったが、彼女たちは仕方なく引き返した。

一方、警視庁 公安部専用オフィス、そこには数人の職員しかおらず、新沼と本澤も含まれていた。新沼は、清々しい顔で外の景色を覗き見しており、本澤は自分のデスクで頬杖をついて何か考え事をしていた。

「...これで手筈は整いました...あとは彼女たちに任せるしかない...上手くやってくれるでしょうか...？」

「...今さら何心配しているんだ？指揮官のお前が不安がってどうする？完璧にやってくれるに決まっているだろう...」

新沼は、本澤の肩を軽く叩き、彼の不安な気持ちを吹き飛ばそうとした。

「...すみません、今になって色々と嫌なことがよぎってしまって...」

「...お前の部下は、そう簡単に倒されないだろう...そこらの部隊と鍛え方が違うのだから...あの麗人たちは国内だけではなく、世界に誇れる優秀なエージェントだ...！」

「ええ、おっしゃる通りですが...何が起こるか分からない仕事ですから...」

「...もう波乱は望んでいないんだがな...奴らにまだ奥の手があるとでも言うのか？」

「...分かりませんが、ただ、あの城ノ内とかいうテロ主犯格は危険すぎる...会わなくても充分伝わります...彼女はリカへの復讐で燃えたぎっているようですから...」

新沼は、今の本澤の発言で不安要素が何かを察した。

「...ふ、お前はよっぽどあの御嬢さんが好きなようだな...実の娘のように可愛がっているのがよく分かる...歌劇団の理事長が嫉妬するぞ」

「...はは、理事長にはお詫びしたいくらいですよ...彼女の退団が迫っているのにこんなことに巻き込んでしまったので...」

「...悔やむ気持ちは分かるが、これは仕方がないことだ...運命には逆らえない...彼女が無事に帰って来るのを祈ろう...」

「...はい」

果てしない親心を持つ新沼たちは、静かに可愛がっている娘たちの帰りを待とうとしていた。

都内上空、緋岡率いるヘリ編隊が飛んでいた。彼らは、身代金を受け取るために真っ直ぐ丸の内方面を目指していた。

「...まもなく取引現場に到着します...約束通りやって来るでしょうか？」

「すっぽかしたりはしないだろう、国民を見捨てることになるからな...ただ、金をちゃんと用意するとは思えない...政府の財布は緩くない...」

「...実は身代金は必要ないんでしょう？どちらにしろ、毒ガスは都内全域に撒かれることになるわけで...」

副操縦士を担当するテロ部隊の一人は、緋岡の策略を見抜いていた。

「...ああ、もうこの復讐劇も終わりが近づいてきた、結末は、日本の首都が絶望に満ちた世界に変貌する...よって日本の機能が停止するというシナリオだ...」

「.....まさか実現出来るとは思いませんでした...僕たちは立派な大犯罪者ですね」

「...今さら怖くなったか？」

「.....いいえ、何も悔いはありません、覚悟の上ですから...」

「...お前、結婚していたかな？」

「...いいえ、独身ですよ」

「恋人とかは居ないのか？」

「...五年程付き合っていました、別れました...」

「...親は健在なのか？」

「いいえ、両方亡くなりました、親父は七年前に...母は去年、心不全で...」

「...そうか、もう待ってくれる者は居ないわけだな...？」

「ええ、兄弟とかも居ませんし、これで心置きなく戦えます.....緋岡さんの家族は？」

「...結婚していたが、すぐに離婚したよ、親はだいぶ前に死んだし、兄弟とも長く会っていない...」

「...そうですか、ご兄弟と会っていないのを後悔していませんか？」

「...ああ、仲はあまりよくなかったしな...疎遠状態だ...特に悔いはない...お前と同じで心置きなく戦える...」

「...ここには僕たちと同じような境遇の人間が多いようですね...」

「そりゃそうだろう...幸せな奴はこんなことに参加せんよ...人生を棒に振っても動じない者たちの集まりさ...」

「...そうですね」

緋岡たちは機内で雑談を続け、周りのメンバーもそれに参加していた。その姿はとても残忍なテロリストとは思えず、とても和やかであった。彼らは先のことを恐れず、前向きに受け止めようとした。彼らを乗せたヘリが目的地に着いた時、運命が決まろうとしていた。

一方、渋谷駅地下開発区域、そこでは長時間の銃撃戦が行われているが、そろそろ終わりに差し掛かっていた。テロリストの強襲に応戦しているリエ、アスカ、クミコに疲れが見え始めて勢いが無くなり、戦況は明らかに不利であった。彼女たちは完全に包囲されて逃げ場はなかった。

「...ちっ、もう弾切れだ、まいったな～」

「...こっちも弾切れです」

「...こっちも...ついでに刃こぼれよ...」

リエたちの得物は、長い戦闘で使い物にならなかった。

「...閃光弾や手榴弾もありません、何か打つ手はありますか？」

「...丸腰で強行突破するって手があるけど、どうする？」

「...私もその手しか思いつきません、本当に悪あがきですね」

「...あなたたちにはまだ先がある、私を置いて逃げるって手もあるわよ」

「...冗談でもそんなこと言わないで下さい、奥ではリカさんが必死に闘っている...先輩たちを置

いて逃げるなんてこと出来るわけじゃないじゃないですか！」

アスカはリエの戯言が気に入らず、思わずきつい口調を発した。

「...嬉しいこと言ってくれるけど、それしか手はないようよ、全員死ぬことはない...」

切羽詰まったリエたちに戦況を変える手段はなく、彼女たちは立ちすくんでいた。

「...!？」

これにより、リエたちの敗北が確定したと思われたが、そこに突如、一筋の希望の光が射しかかった。

「...ボゴオオオオオオオオオオオオオオオ」

突如、炎の渦が放出され、地下は赤く染まった。放出された炎により、大勢のテロリストがもがき苦しんだ。リエたちはそれで危機を免れた。奇襲を受けたテロリスト集団は、突然のことで錯乱状態であった。

炎の渦を放ったのは、チエであり、彼女は成田での増援部隊との戦闘時にあまり実力を引き出せず、ここで溜めこんでいた力を大いに役に立てた。

「...この炎、まさか！」

「...ドバババババババ...ドンドン...ドン」

先ほどまで静まり返っていた地下であったが、再び銃声や爆音が鳴り響き、辺りは騒がしくなった。テロリスト集団は一気に劣勢になった。

「...えらい待たせてすみません、もう安心やで〜！」

チエは、晴れ晴れとした表情でリエたちに呼び掛けた。そこにはチエが率いる班とミユ率いる班数名が増援でやって来た。

「...あなたたちが助けに来てくれたの？SAT部隊は？」

「...彼らには別の仕事があるんで、代わりに私らが応援に駆けつけました」

「...ああそう、とにかく助かったわ、これで有利になった！」

「喜ぶのはまだ早いですよ、さらにサプライズゲストが...」

「...え？」

リエたちは、チエの発言で口がぽかんと開いていた。

「...ズバ！」

その時、一度の斬撃で十人以上のテロリストが倒れ込んだ。

「...あなたは！」

見事な剣技を披露する歌劇団員の名は、トモコ。周りからは愛称で呼ばれることが多い。彼女は現役の歌劇団スターで長年の功績が認められ、スペシャリスト集団が集う班のトップを務めている。また、歌劇団の理事も務めあげ、劇団の伝統を守っている劇団員の第一人者とされる。裏稼業でも数々の凶悪事件を解決したエキスパートとして活躍し、同じ班に所属するミチコと共に犯罪組織と対峙している。

「...遅くなってすまない、急なことなんで手間取ったわ...」

「...理事まで招集されるとは...！深刻さを増していることがよく分かる...！」

「...この騒ぎもじき終結する、リーダー格は何処にいる？」

「.....リカと闘っているはずですよ」

「そう...ここが片付いたら様子を見に行きましょう」

「.....もし、リカ先輩に何かあればどうするおつもりですか？」

トモコは、アスカの縁起でもない発言を耳にした瞬間、険しい表情を浮かべた。

「.....私が標的を斬ることになるでしょうね...！」

重い空気はまだ無くならず、歌劇団メンバーの勝敗の行方は分からずじまいであった。

さらに毒ガスが撒かれる時間は刻々と迫り、悪夢の時間は続くのであった。

## 第八話 華麗なる決死隊

---

最大級の毒ガス装置が作動するまで半時間となり、リカは作動するのを阻止すべく、宿敵、城ノ内と死闘を繰り広げていた。以前より戦闘能力が落ちたはずの城ノ内であったが、なかなか手強くリカは苦戦していた。

「.....随分と手間取っているわね、早く私を倒さないと東京は終わりよ...」

「...はあ、はあ、どうも調子が悪い、あなた本当に城ノ内なの？まるで別人だわ」

「...はは、さすがに驚いているようね、私にも分からないわ、劇薬を服用しすぎておかしくなったかも...他に考えられるとすれば...あなたよ...」

「...また私？」

「...去年、大阪駅にあなたが現れていなければ私はこうはなっていなかった...あの時の私は自信過剰で敵う者は居ないと思っていた...でもあなたはお高くとまっている私の鼻をへし折った...どれだけショックだったか...計画は完璧のはずだった...なのに発案者である朝居が捕らわれ、テロは阻止され、深手を負った...私はそれからあなたに復讐することだけを考えて...！」

「...つまり執念で強くなったと？」

「...そういうことね、皮肉にもあなたに敗れたことで以前より強くなってしまった...あなたを怨めば怨むほど私は強くなる...」

「...成程、科学の力では解明できないことが働いているようね...」

「ええ、今度は勝てないわよ」

「.....とてつもない力を身につけたようだけど、以前よりいい目をしているわね、怨んでいる割にあまり殺気が感じられない...」

「...そうかもしれないわね、さっき私に本当の仲間は居ないと言ったけど、訂正するわ、即席で集められた集団だけど、お互いを陰で意識している...」

「.....！」

その時、リカは城ノ内に反論しようとしなかった。

時間はかなり前に遡る。関西地域でテロが起こる一週間前、テロリストの中心人物である朝居、城ノ内、緋岡は神戸のとある居酒屋で最後の作戦会議を行っていた。その居酒屋は個室のため、落ち着いて話すことが出来た。その時の三人には怪しい雰囲気は漂っておらず、とてもこれからテロを起こすような者たちには見えなかった。彼らは適当に注文して飲み交わしていた。

「...たまにはこういうのもいいもんだ、最初で最後だな...」

緋岡はそう言って、朝居と城ノ内に熱燗の酒を注いだ。

「久々に複数で酒を飲んだ...上手いもんだな...」

朝居は、酒が弱いせいか、おちょこ一杯で顔が赤く染まっていた。

「初めて会った時期からかなり経つわね、会話はほとんどコミュニティーサイトで済ませているからあまり親しい仲ではないけど...」

「別にいいだろう、これくらいが丁度いいんだよ、俺たちは友達じゃない、大事な用がある時だけ集まればいい」

「...ああ、皆、自分のことだけを考えたらいい、勝手に抜けるのも自由だ、今ならまだ間に合うぞ」

「...今更考えを変える気はないね、もう後悔することはない、好きに使ってくれて結構だ」

「...私もよ」

朝居は、同意の上で城ノ内たちにテロ計画の内容を話そうとした。

「...では本題に入ろうか、決行日まであと一週間となった、三人がこうやって顔を合わすのももうないかもしれない...これから役割分担をして行動することになるだろう...」

「...なぜ我々を選んだ？」

緋岡は、今になって中心人物に選ばれたことを疑問に思っていた。

「.....簡単なことだ、一番信頼出来るからだ、おたくらのような一般社会からかけ離れた人材を探していた...元自衛官というには心強い...」

「俺たち以外にも元自衛官はたくさん居るが...」

「...ただ単に戦闘能力がある者は相応しくない、多少頭がよくないとな...」

「嬉しいこと言ってくれるね、それじゃあ神成兄弟は無縁なわけだ...」

「...ああ、彼の能力は高く買っているが、指揮する立場の人間ではない、ただの戦闘狂に過ぎない...他に役割がある」

「...それは遠回しに頭が空っぽと言っているようね...」

朝居は、城ノ内の発言に何も返答しなかった。

「.....それでも納得いかないな、他にも候補が居たはずだが...」

「...変に気が合ったからかもしれない、中でも君らは人間味があつて常識がある...それにあんまり若いのは荷が重すぎるだろう...」

「...確かに俺たちは経験豊富だ、そこらの若僧より百倍苦労している...御嬢さんもそうだろ？」

「ええ、まあ...」

「...特に深く考えていないよ、自分が向いていないと思うのなら誰かと交代させるが...」

「...いいや、よく分かった、納得したよ...御嬢さんはいいのか？」

「ええ、問題ないわ」

「.....しかし、御嬢さんは分からないが、俺は薄情なところがあるかもしれん...突然裏切ったらどうする？」

「...別に素直に受け止めるさ...俺の見る目がなかったということだ...」

朝居は、緋岡の意地悪な質問に冷静な態度で答えた。朝居と緋岡は、朝居の発言で自然に笑み

がこぼれた。

「...本題に戻りましょう、それで例のものは完成したの？」

城ノ内は、朝居が開発した毒ガス発生装置のことを気にしていた。

「...勿論完成している、まあ見てくれ、バリエーション豊富だ」

朝居はそう言って、城ノ内たちに毒ガス発生装置のことを簡単にまとめた資料を渡した。

「...素人の俺たちには違いが分からん、説明してもらえるか？」

「ああ、それぞれ性能や威力が違うわけだが...遠隔操作で作動する物と手動操作で作動する物と二種類ある...」

「...威力の方は？」

「...ピンからキリまでであるが...まず実験として駅構内を狙おうと思う...君に仕掛けてもらいたいんだが...」

朝居は、じっと城ノ内を見て指名した。

「...私に務まるかしら？」

「難しく考えることはない、最初はりハーサルみたいなものだ、装置はアタッシュケースの中に装着されている...ケースを指定した場所に置いて来るだけだ...あとはこっちに任せろ」

「...分かったわ」

「簡単に装置の仕組みを教えておこう、作動すると、容器に入っている毒性のある液体が沸騰して、やがて気体になって外に放出される...無臭に近いからすぐに気づかれることはないだろう...弱点があるとすれば気温だ、低温だと作動しなくなる恐れがある...念のため簡単な保温装置も仕掛けてあるから心配ないと思うが...極度に気温が低い場所だと機能しなくなる...」

「...ところで俺はどうすればいい？」

「.....あんたの出番はまだ先だ、気長に待っていてくれ」

「...雑用じゃないだろな？」

「ああ、雑な扱いはしないよ、あんたは奥の手といってもいい...俺に何かあった時の保険みたいなものだ...」

「...それはどういうこと？」

城ノ内は、朝居の意外な発言に驚愕した。

「...はっきり言って俺はもう役目を果たした、もう裁きを受ける覚悟は出来ている...俺が居なくても問題なく動けるよう準備は整っている...」

「...裁きを受けるのはあんただけじゃない、皆、辿る道は一緒だ...あんたが居ないと場が締まらない...！」

「...今回の件が無事に終結する保証はないんだ、俺は歴史に少しでも爪痕が残ればいいと思っている...障害と向き合うのはあくまでおたくらだ...」

「...あなたの方こそ、私たちに裏切るんじゃないの？」

「...信頼関係に対して臆病になっているな、不信感を持つのは構わないが、たまには信じてみたらどうだ？付き合いは浅いが仲間だ、信用してくれたから備品を提供してくれたんじゃないのか？」

朝居は、不信感を抱く城ノ内を宥めた。城ノ内は少しだけ表情が和らいだ。

「...仲間割れはよそう、目的は一緒なんだ、何事にも恐れず派手に暴れてやろうじゃないか...！」

「...ああ、周りの仲間が倒れても見捨てるくらいの覚悟がいる...それだけ必死だということだ...」

「...ああ、そうだ、確か戦闘能力を高める薬が完成したと聞いたが...」

朝居は、城ノ内の発言ではっとした表情を浮かべた。彼は、鞆から薬袋を取り出した。

「...忘れるところだった、毒ガスより手こずったがようやく完成した...」

「実用化に至ったのね？」

「ああ、自ら実験体となった、実験は成功だよ、もう特に問題ないはずだ、試してみるか？」

「...あんたは度胸があるな、俺は遠慮しとくよ、どうもそういうのは苦手だね...」

「...私は頂いておくわ、もしもの時のために...興味があるし...」

「...完成したとは言ったが、まだ未知な部分がある...劇薬だからなるべく服用しないことをお勧めする...薬の種類は錠剤と直接体内に注入する薬剤に分かれる...特に注入する方は、危険性があるため、ちゃんとした実験はしていない...使うか、使わないかはそちらの判断に任せる...副作用で体に異変が起きても解毒剤はない...まさに諸刃の剣だ...充分注意することだな」

「...全て預かっておくわ」

城ノ内は冷や汗を掻いて、朝居から薬を譲り受けた。

「...これで大体話はまとまったようだな、もう暗い話はよそう、俺たちだけで宴を楽しもうじゃないか」

緋岡は、そう言って朝居たちのおちよこに酒を注いで、さらに注文を追加しようとメニューを見ていた。

「...特別な時にだけ集まるだけだからお互いプライベートのことを知らないな、この機会に色々話してみないか？俺は引き籠りだから外の世界と遮断されている...何か面白い話題があれば教えてほしい...！」

普段口数が少ない朝居であったが、この夜は積極的に会話に参加した。その姿は、とてもマッドサイエンティストとは思えなかった。

テロリストの中心人物は、周りの者に理解出来ない関係性があり、思った以上に結束力が固かった。リカにも理解し難いことであった。城ノ内は、彼女に胸を張って頼もしい仲間がいることを自慢した。

「...頼もしい仲間が居ることはよく分かった、その強さが執念や憎しみで発せられたものじゃな

いことも...ただ、まだ負けは認められないわ、あなたの暴走を止めてみせるわ」

「...随分と余裕ね、そっちは時間が制限されているのよ、何か秘策が？」

「.....そんなものないわ、ただ言えることは私一人で闘っているわけじゃないってこと、...私にも待ってくれる人たちが居るんでね...」

「お互い仲間思いね...そういえば一つ言い忘れていたことがあったわ、毒ガス装置が作動するのと同時にある情報が世界中に流れるわ...」

「...ある情報？」

「...あなたたち歌劇団と警察組織のつながりよ、もし、情報が流れたら世間はどんな反応をするかしらね？」

「...本気で陥れるつもりなのよね」

「...あなたの仲間もろともね、最高のプレゼントでしょう？」

「...いつぞやのゲームでも情報流出を奥の手にしていたわね...絶望という名に相応しい...最高のシナリオね」

「喜んでもらっているよね、もう諦めて成り行きに任せる？それともまだ抵抗する？」

「.....抵抗するに決まっているわ！！」

「...！」

リカは、気合を入れて城ノ内の懐に飛び込んでいった。その姿は、闘争心むき出しの闘牛のようであった。城ノ内はリカの気迫に押されそうになっていた。

「...まだこんな力が残っていたの？...！」

城ノ内はリカの底力で弾き飛ばされた。リカは弾き飛んだ城ノ内を追い、接近戦へと持ち込んだ。お互い死力を尽くし、想いをぶつけた。

「...ボゴ！バギャ！ババゴギャ！」

リカたちはほとんど防御せず、攻撃を受け続けるが、倒れようとしなかった。地面には二人の血が飛び散っていた。

一方、応援に駆け付けたチエたちにより、テロリスト集団は劣勢となり、やがて沈黙した。先行部隊であるリエ、アスカ、クミコはほっとした様子であった。

「...あなた方も人が悪い、久々にひやひやしましたよ...もう少し早く来てもらってもよかったのでは？」

アスカは、チエとトモコに軽く苦言を呈した。

「...そう目くじらを立てんといてや、私らも別件で取り込んでいたんや」

「...私も途中参加で上手く状況を把握していない...戦力のほとんどはここに集中しているようだね...」

「...ええ、主犯の城ノ内が指揮しているようですが...他に何か動きが？」

「...この他に増援部隊が潜んでいたんや、戦力を分散して攻めることを企てていたようや...」

「...その部隊はどうなったんですか？」

「...私らで沈黙させた」

「...！よく潜伏場所が分かりましたね...」

「...私らが見つけたわけやないよ、ただ指示通りに動いただけや、楽な仕事やった」

「...指示をしたのは誰なんですか？本澤課長ですか？」

「...いや。違う、情報提供者はミユや...」

「...ミユさんが！」

「...彼女が率いる班は、特に隠密行動に長けているからな、私らより先に敵地に潜入して情報収集していた...」

「...そうだったんですか、陰で色々と助けられているようですね...」

「...ええ、都内に仕掛けられた毒ガス装置はほぼ回収したけど、まだとっておきのが残っているようね...」

「...ここにはないんですか？」

「ミユの情報によれば、別の場所に仕掛けられているみたいよ、つまり陽動作戦にはまったわけよ...」

「...もう装置は回収されたんですか？」

「...それはまだ不明よ、今、彼女と連絡が取れない...彼女が何か手を打ってくれているのを願うしかないわ...」

「...あなたたちは何も知らない？」

アスカは、ミユ率いる班の若手メンバーに問いかけた。

「...私たちも連絡が取れません、別行動で動いているので...」

「そう.....アヤカさんたちとも連絡取れないし...どうしたのかな？他に何か情報はありますか？」

「.....警視庁に身代金の要求があった、金額は十五億...もうすぐ引き渡す時間よ...」

「...どうも臭うな~何か裏がありそうな感じがするけど...十五億円なんて大金、簡単に引き渡すとは思われへんし...」

チエは臭いを嗅ぐ仕草をして、身代金の件について疑問を抱いていた。

「...心配ごとは多々あるが、体は一つなんだ、今は任された現場で出来ることに集中しよう...」

トモコは現場の責任者として、チームをまとめようとした。彼女たちが命令されるまで待機する中、リエが何処からか戻ってきた。

「...リエ、何処に行って来たの？」

「...奥の方を探索して来ました、かすかに気配も感じる...そろそろリカの様子を見に行きませんか？」

「...そうね、今回の件のキーパーソンだし、退団を控えた彼女に何かあれば、理事長に合わせる顔がない...」

トモコたちはリエの誘いに乗り、リカの行方を追おうとした。

場所は変わり、丸の内ビジネス街に位置する某大企業の高層ビル。テロリストに身代金を渡す時間が訪れていた。ビル内の人間は、テロの影響で既に避難していた。屋上には金が入ったアタッシュケースを運んできた警察職員十数名が静かに待機していた。約束の時間の五分前になろうとした時、空を見ると三つの飛行物体が確認出来た。ついに緋岡率いるテロリストと対面する時が来たのであった。

担当職員は標的を確認して所定の位置についた。一機のヘリが屋上のヘリポートに着陸しようとして、残り二機はそのままホバリング（空中停止）していた。着陸したヘリはエンジンが切れ、ローターの回転が止まると、機内から数人のテロリストが姿を現した。

最後に主犯格である緋岡が降りてきた。

「.....約束通り来てくれたようだね、お金は用意出来たかな？」

緋岡は、陽気に担当職員に離し掛けた。

「.....見ての通りだ、並べてあるアタッシュケースに要求した札束が入っている...」

「...結構、よく持ってきてくれた、それでは敬意を表して有難く頂こうか？」

緋岡は、不敵な笑みを浮かべながら職員たちにそっと手を差し伸べた。しかし、職員たちはすぐアタッシュケースを渡そうとしなかった。

「...この金を渡せば、お前たちは引き揚げるのか？」

「...ああ、目的は果たしたからな、かなり楽しめたよ、色々と迷惑を掛けて悪かったね...これから大変だね、対応に追われて...」

「...勝った気でいるな、逃げ切れると思っているのか？」

「...途中トラブルがあったが、順調に動いている、おたくらは我々の手のひらの上で遊ばれているのさ...まだ抵抗するつもりか？」

「.....さて...どうかな？」

リーダー格の職員は緋岡の問いに対し、多くを語らず、アタッシュケースに手を伸ばした。周りの職員も用意されたアタッシュケースを適当に持ち上げた。

「...これからどうなるか楽しみにしておくよ...」

「...！」

リーダー格の職員は、緋岡にアタッシュケースを渡そうとするが、取っ手を強く握り、手放すのに少々時間が掛かった。それは何かを暗示したかのようであった。どうも違和感があったが、緋岡は気にせず、身代金を受け取ろうとした。

「...！」

その時、何処からか緋岡たちの様子を望遠レンズで覗きこむ人物が居た。その人物はライフル銃を構えており、静かに照準を合わせた。そして、自分のタイミングで引き金を引いた。

「...バギン！！」

ライフル銃から発射された弾は、緋岡が持つアタッシュケースに命中し、衝撃で地面に弾き飛んだ。謎の狙撃により、現場は騒然となった。

「...どういうつもりだ？」

「.....反撃の合図や、もう逃げられへんで」

リーダー格の職員は、突然、関西弁の口調で話して緋岡を睨み付けた。周りの職員も様子がおかしく、事態は大きく変化するのであった。

「...おたくたちに払う金は一円もないよ、大人しくしてもらおうか...？」

「...ただの警察の職員じゃないな、何者だ？正体が知りたい...！」

警戒している緋岡たちの対し、謎の職員たちは、そっと自分の顔に手を添えた。彼らは変装しているようで勢いよく変装マスクを剥がした。

「...！！」

緋岡たちの前に現れたのは、ミユ率いる歌劇団部隊であった。

「...まんまと罠にはまってくれて感謝や、せっかくやけど金是用意してへん、交渉決裂やな～」

ミユは、紙切れの束が入ったアタッシュケースの中身を緋岡たちに見せて、上機嫌であった。紙切れの札束は、風で儂く飛び散った。

「...これで全て解決したと思っているのか？交渉に応じないのなら分かっているはずだ...東京は毒ガスに覆われるぞ...！」

緋岡はミユたちを脅そうとするが、彼女たちは何故か動じず、平然とした態度であった。

「.....身代金はフェイクやろ？身代金を渡そうか渡すまいが、毒ガスはばら撒かれる...退散した後にもばら撒くつもりやろ？」

「...！！」

ミユが言ったことは凶星で、緋岡から余裕の笑みが消えようとしていた。

「随分賢いな...お前たちは一体...？」

「...おっとまだ名乗ってなかったね...でもよく知っているはずや、私らのこと、調べ上げたようやね？」

「.....そうか、例の秘密警察か...！かなり因縁があるようだな...丁度決着をつけたいと思っていた...！」

「...では大人しく投降しないわけやね？」

「当然だ、まだ巻き返せる...それにまだ他の場所で戦っている仲間が居るんでね...降参はしない

...毒ガス装置の場所は分かるまい...」

意地を張る緋岡に対し、ミュはさらなる事実を述べようとした。

「...うちの情報網を甘く見てもらっては困る...実はうちの部下がスパイとして、おたくらの部隊に紛れ込んでたんや...！」

「...何！！？」

普段、冷静沈着な緋岡でも驚きは隠せず、周りのテロリストも表情が崩れた。

「...全く気付かへんかったような、潜入、変装はお手の物やからな、なんといってもうちの班は的確な情報を基に仕事する...油断大敵やね...」

「.....だから増援部隊のことが分かったのか...最後の毒ガス装置の場所も突き止めたとはな...」

「...かなり苦労したけど、主犯であるあんたらの会話を傍受したりして徹底的に調べた...場所のことを耳にした時は驚いたで...！」

「...そうだろ、お前たちにとっては核ともいえる場所だ...！」

緋岡は、ふと意味深な発言をした。最後の毒ガス装置が仕掛けられた場所とは、歌劇団員と縁が深い場所、すなわち東京歌劇団劇場であった。その劇場は、モダンな洋城をモデルにした本拠地の劇場と違い、近未来的で都会の真ん中に堂々とそびえ立っていた。装置は劇場の地下に仕掛けられており、派遣された歌劇団、SAT部隊は近辺の地下鉄駅構内を封鎖、全ての車両を運行停止させ、緊急を要する事態に向き合った。

「...今頃、仲間が発見しているはずや、奥の手は期待出来へんな」

「...そうでもないさ」

「...？」

緋岡の態度を見るとまだ余裕があり、それは何処となく不気味であった。

「...さっさと始めよう、もう幕が下りる」

「そうやな、いいオチを期待しとくわ」

お互い得物を構えて、高層ビル屋上は瞬く間に戦場が変わった。

「...ドドン...ガキン...ババババ...ドバ...」

「.....パーティーは賑やかみたいだな、しばらくこのままだ...」

屋上での模様は、音声だけであるが警視庁につながっていた。新沼含め、警察幹部のほとんどが余計な口を挟まず、強張った表情でミュたちの様子を確認していた。

「...ドン...ドドン」

荒れ果てた屋上であったが、そこにまた狙撃手が望遠レンズで覗きこんでおり、標的目がけて発射した。テロリストは狙い撃ちされ、防ぎようがなかった。これで若干、ミュたちが優勢であった。狙撃しているのは歌劇団メンバーのマギーで、彼女は、ミュたちが居る場所から五百メートルほど離れて狙撃していた。

「...ちっ、小癩な...！」

緋岡は、苦戦している状況を改善しようとする指示を出した。すると、上空で停止していたヘリが動き始めた。

「...しまった！」

「ここを狙撃出来る場所は限られている...コソコソ隠れている鼠を炙り出すんだ！」

ミュの嫌な予感が的中し、ヘリ一機がマギーを探そうとビル群に向かった。

「...やば、逃げないと」

マギーは危機を察知し、逃げる準備をしようとした。

「.....ドギャギャギャ！」

「...？」

その時、マギーが居る方向に向かった敵機ヘリが攻撃を受けた。攻撃したのはミユ率いる部隊ではなかった。空を見上げると、一機のヘリが飛んでいた。そのヘリにはずっと待機していたユウコ、アヤカ、チヒロ、ミサトが搭乗していた。予期せぬ新手に、緋岡たちは焦りの表情を浮かべた。

「...やっと来たか、頼むで！」

ミユは、助っ人が来たことで肩を撫で下ろした。

「もう出番はないかと思ったよ～皆の衆、準備はいいか？」

「おー！！」

随分と待たされたユウコたちは、鬱憤を晴らそうと敵陣に乗り込んだ。ヘリはユウコが操縦しており、残りのメンバーは、扉を開けて重火器などで応戦した。派手な空中戦が展開され、戦況は大きく変化した。

「くそっこうも客が多いと...まだこれだけの戦力を残していたとは...やってくれる！」

「...これでも想定の範囲内なんか？」

「...ふ、やはり天はこちらに味方してくれないか...」

緋岡の計算は狂い、苦笑いをするしかなかった。こうして、ビジネス街での激戦はしばらく続くのであった。

一方、地下でのリカたちの死闘も終演を迎えようとしていた。麗人たちの活躍を知る数少ない人々は、彼女たちに運命を託したのであった。

## 第九話 闇の使者

---

テロの騒ぎが起きてかなりの時間が経ち、気づけば空は赤く染まろうとしており、歌劇団部隊とテロリストの死闘は、最終局面を迎えようとしていた。

丸の内方面では、ミュ率いる班と緋岡率いるテロ集団の死闘が繰り広げられていた。戦況は若干、ミュたちが有利であった。ずっと待機していたユウコたちは、やっと活躍の場を設けられ、ヘリの空中戦で奮闘していた。

周りの仲間が攻め合う中、ミュと緋岡は、得物を下げて手を止めていた。二人は話をしようとしていた。

「...もう勝ち目はなさそうやで」

「...いいや、まだ分からんよ、うちにはまだ頼みの綱がある...！」

「例の毒ガス発生装置か...もう回収されたはずやけど...」

その時、何故か緋岡はミュの発言に対し、不敵の笑みを浮かべた。

「.....装置がある場所を見つけたことは褒めてやるが、無闇に触らない方がいいぞ...今までの物と比べて別物だからな...」

「どういうことや？」

ミュは、緋岡の意味深な発言に対し、敏感に反応した。

「最後の毒ガス装置は、威力だけでなく、全てにおいて最高傑作...手動で解除することは不可能だ...低温に弱いとされていたがそれも克服している...！」

ミュは、緋岡から重要なことを聞いて、慌てて装置を回収しようとする仲間に連絡を取ろうとしていた。装置回収を担当しているのは、ミュ率いる班のメンバー、トシミとユリであった。

「...今、どういった状況や？」

問題の毒ガス装置は、ある地下でミュの仲間とSAT部隊に囲まれていた。

「.....現在、カウントが表示された状態です...もうあまり時間がありません...どうしますか？冷却すれば停止するはずですが...」

「...いや、余計なことはしない方がいい、指示が出るまでそのままにしといてや！」

「...了解しました！」

ミユたちの形勢逆転かと思いきや、まだ油断出来ない状況であった。

「...遠隔操作している場所も装置が仕掛けられた場所も別々...ここでは何も出来ない...お前たちはただ我々と戦うしかないんだ...打つ手なしだ...」

「...くっ」

ミユは悔やんで下唇を噛んだ。

「.....解除方法を知っているのは、主犯メンバーである朝居と城ノ内、そして、俺だけだ、そう易々と教えるわけにはいかないな...特に俺は口が堅いぞ...諦めるんだな」

緋岡は、軽快な口調でミユたちに語り掛けて嘲笑った。

「...ミユさん、どうしますか？」

歌劇団部隊の一人が不安げな表情でミユに歩み寄った。その隊員の名はミキ。ミユが認める若手ホープの一人である。

「.....まだ希望はあるで、装置を操作している場所にも仲間が居る...それにリカさんがどうにかしてくれるはずや...！」

ミユは別の場所で必死に闘っているリカに託し、今、目の前にいる敵に立ち向かおうとした。

一方、リカは、毒ガス装置を解除しようと、城ノ内に捨て身の覚悟でぶつかった。

二人は闘いの場を地下水路に変え、死闘を続けた。決戦場は水の流れて足場が悪く、少々動きが悪いように見えた。まさにそれは泥臭い勝負であった。

「.....はあはあ...そろそろ時間やばいんじゃない...？私から解除方法を聞き出すんでしょ？」

「...ふう、そっちはいいわね、解毒剤か何かあるから平然としてられる...」

「.....」

その時、何故か城ノ内は表情が少々強張り沈黙した。リカは、それを見て不審に思った。彼女は時間がないにも拘らず闘いを一時中断しようとした。

「...例の装置には他に秘密がありそうね？もう聞かせてもらってもいいでしょう？」

城ノ内は強張った表情のまま、重い口を開こうとした。

「.....ここに仕掛けられた毒ガスの解毒剤はないわ...！」

「...え？」

リカは城ノ内の衝撃的な発言に啞然とした。

「...開発者である朝居は、完璧なテロ兵器を求めて、例の装置を完成させたと言っていた...だからそれに打ち勝つものなど存在しない...解毒剤を作ることなんて不可能なのよ...」

「...それではあなたも助からないじゃない！」

「...ええ、そうよ」

「...よくそんなに落ち着いていられるわね、逃げる素振りは見せないし...仲間とかが助けに来ないの？」

「...来ないわ、それぞれ役割があるからね...ここが私の終着点よ...」

「...本当にここで死ぬ気？」

「...ええ、どちらにしろ、もう長くない...私はあなたたちを引きつけるための餌に過ぎない...」

「...地下に居る仲間たちも巻き添えにする気？」

「...別に何も指示していないわ、私は一人で充分だと言ったのに聞かなくてね...自分の意志で決断したことよ、こんな馬鹿なことに付き合う必要ないのに...」

「.....」

リカは、今の城ノ内の発言が気に食わない様子であった。

「...何か言いたそうね？」

「.....ええ、馬鹿なのはあなたの方だと思ってね...何も分かつちやいない、皆、あなたを慕っているから残ったのよ...信頼してついて来たからよ...」

「...そういう戯言は聞き飽きたわ、とにかく私もあなたも助からない...まず地下全域に毒が広がる...ご自慢のあなたのお仲間も道連れよ...運命には逆らえないわ」

「まだ諦めないわ、あなたの野望を阻止して仲間のもとに帰る...！」

「...やれるものならやってみなさいよ！」

「...！」

その時、リカの目つきが鋭くなり、城ノ内に真っ直ぐ突っ込んだ。城ノ内は退こうとせず、応戦しようとしたがどうも様子がおかしかった。

「...！！」

リカは死闘でかなり体力を消耗しているはずだが、動きにまだ切れがあった。彼女は水面上で少々動きが鈍かったが、確実にダメージを与え、城ノ内にひたすら水しぶきと攻撃を浴びせた。これで城ノ内は劣勢になりつつあった。

「...バシャ！！」

「...はあはあ...はあ...」

城ノ内は、リカの会心の一撃を浴びせられ、ついに尻餅をついた。リカは息が上がり、ふらふらであった。

「.....さすが私が認めた宿敵ね...底力が半端ない.....もう止めを刺しなさい...」

「.....殺しはしないわ...寿命が来るまで罪を償ってもらおう...！」

「...甘いわね、私はしつこいんでね、モタモタしていれば返り討ちに遭うわよ...」

「.....！」

リカが躊躇する中、城ノ内はそんな状況に嫌気が差してある行動に移った。城ノ内はリカに自分の銃を放り渡した。

「...もうちまちました肉弾戦は終わりよ、武器の使用を認める...あなたが使用している銃弾は、殺傷能力がないようだから私の愛用している銃でひと思いに撃って頂戴...毒で苦しむより自分の銃で撃たれる方が楽に死ねる...」

「死に無頓着のようだけど...こんな結末、認めないわ」

「...この勝負の勝敗はすでに決まっていた、あなたたちはただ弄ばれていただけ...付き合ってくれて感謝するわ.....引き金を引けば、ようやく終止符が打たれる...結局、勝者は私よ...」

「.....それはどうかな？」

リカは、城ノ内に銃口を向け、少しの間そのままの状態であった。

「.....ドン！」

やがて、リカたちが居る地下水路で一発の銃声が鳴り響き、その場は静まり返った。結果はどうあれ、一つの戦いが終わりを告げようとしていた。

一方、丸の内の高層ビルでの死闘も終わりを迎えようとしていた。ヘリの空中戦は、歌劇団部隊のユウコ、アヤカ、チヒロ、ミサトの活躍により勝利を収めた。テロリストのヘリは彼らに撃墜されたが、死亡者はおらず地上で待機していたSAT部隊に確保された。

残るはミユと緋岡の対決のみであった。仲間が少なくなっていき、得物を失った緋岡は、最後の手段に出ようとした。

「...！」

緋岡はヘリポートまで駆け込み、最後の一機となるヘリに乗り込んだ。ミユたちは彼の離陸を許してしまった。緋岡は逃げることを考えず、旋回して得意のヘリの操縦でミユたちに挑もうとした。

「...まだ厄介なのが残っていたか...もう一仕事するかな...」

「...余計なことはしない方がいいですよ、彼女、獲物を横取りされたら先輩でも怨みますから...」

「...あっそうなんだ」

アヤカは、同期であるミユのことをよく分かっており、何も知らないユウコにそっと忠告した。長い付き合いがある同班のマギーも、ミユに加勢しようとせず、備えているライフル銃の銃身を下げた。

「...あれは私のものやから、下がってや」

「了解しました、皆、あとは任せよう...」

若手劇団員をまとめたのは、注目の歌劇団スターの一人、エリカ。長身で現代的な容姿で魅力がある舞台人として評価されている。新人時代に大役が任されるほどの実力者で、着々とキャリアを積んでいる。当時、リカ率いる班で様々なことを経験し、現在は、ミユ率いる班で中堅実力派スターの位置についている。

裏稼業でもミユたちと共に日々活躍しており、密偵活動、情報収集、時には特攻を任されているエージェントである。

ミユの仲間は、素直に彼女に従って安全な場所まで下がった。これでミユだけが残り、愛用しているサーベルを構えたまま、上空にいる緋岡に立ち向かおうとした。

「...ふ、面白い...決戦に相応しい状況だ...こうでなくては...」

緋岡は、微笑みながら屋上で待つミユに照準を合わせた。

「...ドガガガガガガガ！...ドガガガガ」

緋岡は、容赦なく装備された重機関銃の弾をミユに浴びせようとした。逃げ場が限られたミユであったが、彼女に不安な表情は浮かんでいなかった。華麗に銃弾の雨を避けていき、ミユは何かを狙っていた。ミユの仲間たちは、固唾を飲んで見届けていた。

緋岡が操縦するヘリは、徐々に高度を下げていき、乱射は止まらなかった。ミユはちょこまかと逃げ回り、緋岡を翻弄していた。

「...どないしたんや、そんなもん使っても倒されへんのか？」

「...ちっ、逃げ足が速い鼠だ...」

緋岡はたちまち苛立っていき、危険は承知で低く飛んで、強引に屋上に突っ込もうとした。さらに不利になったミユであったが、彼女はこの時を待っていた。

「...？」

その時、緋岡は、ミユを見失った。ミユは瞬時に死角の場所へと移動しており、気づけばホバリングしているヘリの真下であった。それは灯台下暗しの状態で、もう手が届きそうであった。ミユは一瞬の隙を狙い、真上にいる緋岡に襲い掛かった。

「グザザザザ.....！」

ミユは、常人以上の跳躍力でヘリに飛び掛り、愛用しているサーベルでヘリの背面を深く抉った。

「...何だと！！？」

緋岡が気づいた時はもう遅く、破損したヘリは制御不能となり暴走していた。緋岡はもうヘリを捨て、脱出することに徹した。

彼は、扉を開いて決死のダイブを行った。自殺行為だと思われたが、用意したパラシュートが役に立ち、どうにか地上へと運ばれた。

「...俺もしぶといね～.....！！」

運よく助かった緋岡であったが、既に大勢のSAT部隊に包囲されていた。彼は素直に投降した。ヘリの方は正常に飛べないまま、派手に無人のオフィスビルへと突っ込んだ。これでミユたちの戦いは終結することとなった。

「...ミユさん、やりましたね！」

「...アホ！まだ重要な件が残っている...！装置は！！？」

一仕事終わったミユに休む暇はなく、血相を変えて仲間たちに怒鳴った。

「...あと起動するのに十分もありません！どうしたらいいんですか？」

「.....待ってや...遠隔じゃないと解除出来ないから...まだ解除方法を知ってる者が居るはずや...地下の方はどうなった？」

最後の毒ガス装置を前に発見した歌劇団部隊は、不安げな表情を浮かべながらミユの指示を待っていた。ミユは、すぐさま地下に居る部隊と連絡を取ろうとした。

渋谷駅地下にはリエ、アスカ、クミコ、チエ率いる歌劇団部隊などが残っていた。リカの消息が気になる歌劇団部隊は、最年長で歌劇団の頭であるトモコを先頭にして探索した。奥へと進むといくつかの機材が目に入り、もぬけの殻となった城ノ内が潜んでいた場所に辿り着いた。

「...どうやらここが奴らの核のようだね、主人の姿がないようだけど...」

派遣された歌劇団部隊は、トモコの指示で辺りを調査した。

「...画面にカウントが表示されている...まさか毒ガスの...！」

「ここで操作していたのか...どうしたら解除出来るんだ？」

トモコたちが困り果てる中、ミユから連絡が入り、若手隊員の一人、アサミがトモコに専用無線機を渡した。

「ザザ...こちらは片付きました...トモコさん、そっちはどういう状況ですか?...ザザ...毒ガス装置はそちらから操作出来るはずですよ...ザザ」

「ああ...こっちはいい状況とは言えないよ...問題の装置を操作している場所に辿り着いたが、誰も居ないし、解除方法も分からない...このままでは万事休すさ...」

「...ザ.....リカさんはどうなったんですか?...ザザ」

「...彼女も現在、行方不明だ...ここで何があったか知りたいものだが...」

残された歌劇団部隊は、困惑し続けて手を拱いていた。主力となるメンバーは、じっとしたま

ま自分の無力さを感じ、歯がゆくなりつつあった。

「……！！」

その時、奥の通路から気配を感じ、歌劇団部隊は警戒した。二つの気配が確認され、足音は大きくなっていき、それらはゆっくりと歌劇団部隊が居る場所に接近していた。歌劇団部隊は装備しているものを瞬時に構え、いつでも応戦出来る状態であった。

「…！！？」

二つの気配は歌劇団部隊の前に姿を現すが、攻撃する意思はなく、じっと立っているままであった。その正体が判明した時、歌劇団部隊はただただ驚くばかりであった。

「…リカ！」

チエがそう呼び掛け、彼らの目の前には、ずぶ濡れで疲れ切ったりカと城ノ内の姿があった。

「…しばらく留守にしているうちに賑やかになったわね…」

そう軽く冗談を言い放ったのは城ノ内の方で、リカは意識を失っているようであった。城ノ内は、ぼろぼろの体で肩を組み、リカを運んで戻って来たのであった。

「…あなたが城ノ内だね？」

トモコは、そっと城ノ内に離し掛けた。

「…ええ、そうよ、彼女のお仲間のようなね、こちらの御嬢さんは無事よ…ちょっと疲れてるみたい…」

「…その様子だと二人で争ったようだけど、結果はどうなったの？」

城ノ内は、意識を失ったりカを仲間に返して簡単に説明しようとした。

「彼女は以前闘った時よりしつこくてね…それでまた敗けるのを覚悟した…彼女は最後に私に銃を向けて撃ったけど、外してそのまま倒れ込んだわ…それで私がここまで運んできたわけ…」

「よく彼女を放って逃げなかったわね、絶好のチャンスだったのに…」

「...そんな元気はもうないわ、私もくたくたでね...もうどうでもよくなったわ...」

「...じゃあ素直に投降するのね？」

「ええ、もう悔いはないわ」

「そう...でもこれで一件落着とはいかないんでね...毒ガス装置を解除してほしいけど...勿論、応じてくれるわね？」

城ノ内は何も迷いがなく、涼しい表情で即答した。

「...ええ、時間はわずかしかなから早速取り掛かりましょうか.....それと一つお願いがあるわ...」

「何なの？」

「...私一人では解除できないわ、解除方法を知っている仲間の力がある...」

「生憎だけど、仲間は全員確保したわ...呼ぶとなると時間が掛かるかもしれない...私たちでどうにかならないのか？」

要求を断られた城ノ内は、仕方なく別の手段を選ぼうとした。

「...プログラマーが二人ほど居れば助かる...私を含めて三人居ないと解除出来ないわ...」

「...プログラマーか、うちにそんなの居たか？」

トモコは、要望の人材を探そうと仲間たちを見渡した。メンバー同士ちらちらと目を合わせると該当する人材がいるようであった。一人はチエ率いる班のミツキでもう一人はミユ率いる班のマイであった。

マイは、歌劇団ファンになったことがきっかけで入団するわけであるが、小柄で目がパッチリして女性の印象が強いため、男役には不向きとされることがあった。しかし、それは持ち前の実力で補えたわけで順調にスターの階段に駆けあがることが出来た。また、見た目は可愛らしい顔立ちだが声が低く、そういったギャップも注目すべき点である。裏稼業では、主にハイテク機器を駆使した手段で任務に対応するわけだが、十年程、特攻専門のチエたちがいる班（同じ頃、リカも所属していた）に所属しており、決して戦闘経験が乏しいわけではない。万能な頭脳と恵ま

れた身体能力を兼ね揃えた頼もしいエージェントの一人ともいえる。

ミツキとマイは、自信を持って挙手して、直ちにトモコが立っている場所へと向かった。

「...後のことは頼んだよ、すぐ取り掛かって...！」

ミツキとマイは、城ノ内の指示で毒ガス装置の解除作業を開始した。

「.....！」

その時、リカの意識が戻ったようで、彼女はゆっくり目を開いた。

「...おお、気が付いたか！」

「リカさん、よかった！」

リカの近くにいた仲間たちは、大いに歓喜を上げた。

「...チエさん、それにアスカたちも無事だったんだね...」

「...アホ、自分の心配せんかい、死んだかと思ったで...！」

「はは、まだ死ぬわけにはいきませんよ、やることはたくさんあるんでね...」

「...ふ、もし、あの世に行ったら引きずり出すところやったわ...」

チエはリカの横に座り込み、肩を組んで友情の絆を深めた。

「.....あの城ノ内とかいう女性に感謝するんだね、相変わらずツメが甘いな...」

「...いしさん！お久しぶりです...！」

リカは、トモコと目が合った途端に起き上がって背筋をぴんと伸ばした。

「...そう無理はしないで、今は寝転がるのを許す...関西で起きたテロからご苦労だった...あの頼りなかったりカがここまで活躍するとは夢にも思わなかった...見違えたよ...！」

「...いえいえ、私をもっとしっかりしていれば、被害を少なく出来たかもしれません...」

「反省する点はあるが...あんた一人で片づけられないのは明白だ、それにこの件にはあんた以外に多くの劇団員が関わっている...ここに居る仲間の力がないと解決出来なかった...そう思わない？」

「...おっしゃる通りです、普段はバラバラで仕事していますが、いざ力を合わせれば驚異的な力を発揮する...素晴らしいことです...！」

「ええ、今回は多くの仲間に救われたね、彼女にも救われたわけだし.....」

「...彼女？」

口をぽかんとリカは、トモコが指差す方向を辿っていた。

「じょう...城ノ内...！彼女は一体何を...？」

「...毒ガス装置を解除してもらっている...今の彼女からは殺気や邪念など感じない...どういった魔法をかけたの？」

「...私は何もしていません、ただ...会った時嬉しそうでした...大阪で会った時とは別人みたいで...」

「...成程、住む世界が違えど、分かり合える相手を見つけたわけね...あなたが彼女を変えたようね」

「...私ですか？」

リカは、理解出来ず大きく首を傾げた。

リカたちが雑談しているうちに解除作業は仕上げに入ろうとした。城ノ内だけでなく、ミツキとマイのタイピングも負けず劣らず、まさに神業の域であった。

「...よし、順調ね...」

作業していた城ノ内は、ふと安堵の表情を浮かべた。

「何とかかなりそう？」

リエは、そっと作業中の城ノ内に話し掛けた。

「...ええ、特に問題ないわ、楽しくお喋りしてて結構よ...」

リエは、城ノ内の返答を聞くと嬉しそうであった。

わずかな時間で解除作業は終わり、城ノ内は、歌劇団部隊たちに作業終了の合図を送った。

「...もう終わったの？」

「ええ、優秀な助手が居てくれたお蔭で作業がスムーズだったわ...」

「解除作業は複雑なの？」

「...まあね、プログラムを書き換えるだけなんだけど、膨大な量でね...とても一人では手に負えないわ...」

作業を無事終えた城ノ内は、最後にパソコンのエンターキーを押した。すると、カウント画面に変化があり、残り一分十九秒を残して停止した。同時にリカたちの秘密は世間に暴露されることはなかった。

「.....停まった.....！」

「ほんまに心臓に悪いわ...」

「敵ながら天晴だ、これで多くの命が救われた...変な話だけど感謝するよ」

「.....ただ借りを返しただけよ、私は二度、命を救われたからね...そちらの御嬢さんに...」

「え？」

城ノ内は、借りを返した相手をリカだと訴えた。

「本当なら私は大阪で死んでいた...まさか東京でこんな大それたことが出来るとは思わなかった...今回も死を覚悟したけど、何故か生き延びた...あなたと会ったことで予想外のことがよく起こる...不思議な人ね...」

「...変な人ってよく言われるけど...」

「はは、それがリカの魅力でもあるんだけど...先輩たちはそんな彼女に手を焼いたものだよ...」

リカと長い付き合いがあるリエとチエは、トモコの発言に対して納得して頷いた。リカは、そんな二人をじっと睨みつけていた。

一方、他の場所でもテロ事件解決のことが伝わっていた。

「...ふー、冷や冷やさせるわ」

城ノ内たちが遠隔操作で解除したため、連動していた毒ガス装置も同時に停止した。これでミユや装置の前で待機していた歌劇団、S A T部隊は、肩の荷が下りたのであった。絶望から解放されたリカたちは、テロ主犯の城ノ内を連れて地上に姿を現した。

外は日が沈み、すっかり暗くなっていたが、警察の用意した照明で辺りは異常に明るかった。報道関係者はすでにスタンバイしており、リカたちはカメラに映らないよう、警察に城ノ内を引き渡した。彼女たちはあくまで影の存在であるため、目立たないように現場を後にした。城ノ内は、無言のまま夜の市街地から消えていくリカたちの姿を見た。この先、リカと城ノ内は会うことはなかった。

こうして、長きに渡って繰り広げられたリカたちの死闘は、幕を閉じようとしていたのであった。

## 第十話 終章 巣立つ鳳

---

東京都 警視庁

リカたちの活躍でテロ事件が終結し、さっきまで緊迫していた会議室内はがらんとしていた。退室した幹部の中には長時間座っていたせいか、お尻の部分を押さえる者がいて、ご老体にはかなり堪えた様子であった。しかし、彼らに休む暇はなく、玄関口で待ちかねているマスコミの相手をしなければならなかった。

同じ頃、リカたちの直属の上司である新沼と本澤もほっとした様子で、気楽に雑談しているようであった。

「...やはり我々の部下は優秀だな、何か褒美を用意しないとイケないかな...」

「ふふ...欲しいものは全員一致するはずですよ」

「.....ああ、そうか、今の彼女たちに必要なのは休養だな...とは言ってもそれは歌劇団の理事長と相談しないとイケない...」

「...まあ彼女たちなら大丈夫でしょう、私たちが思っている以上に強いんで...」

「ああ、影でありながら彼女たちの存在は大きい...今後も活躍の場が広がるだろう...」

「...コンコン」

「...?」

その時、一人の職員が来室し、ご機嫌の新沼と本澤に何かを報告しようとした。

「.....報告します、テロの主犯である朝居容疑者が死亡しました...」

「...何だと...!なぜ死んだ?」

「...朝居は獄中で泡を吹き、体が冷たくなっていました...体内から毒物が検出されました...彼は毒物を隠し持っていたようです...」

「...裁きが下るのを待たず、自ら命を絶ったか...彼ははじめから死ぬつもりだったのか?」

「そうかもしれませんね...テロ作戦が失敗するのも予測していて...ずっと一人で待っているのが苦痛だったんでしょう」

「...結局、彼も犠牲者の一人となったわけか...テロの犠牲者のところには行けないと思うが...」

新沼たちは、突然の報告を耳にして驚愕し、その反動で力が抜けた。後に朝居の死はリカたちにも知らされ、波紋を起こす結果となった。

それから数日経ち、東京都内は平和な時間を取り戻した。リカの方はいつも通り舞台の仕事の取り組んでおり、つい最近まで死闘を繰り広げていたのが嘘のようであった。リカのサヨナラ公演は、無事に怪我やトラブルもなく、予定通り上演され、気づけば千秋楽の日が近づいていた。

千秋楽前日、かつての同期劇団員であるユカとミナコがリカの居る楽屋に顔を出した。ユカたちはリカの卒業公演を観劇した後、楽屋に立ち寄ったのであった。リカはテロ事件のその後を調べている二人から情報を聞き出そうとしていた。

「...朝居のことは残念ね...はつきり言って汚いわ...やることだけやって勝手に死ぬなんて...」

「...そうね、彼は法廷で裁かれるべき人間だった...監視を怠ったわ...」

ユカは、リカの発言に強く同意した。

「...それで残りの主犯二人はどうなったの？」

「...緋岡とかいうヘリの操縦を担当した男は、事情聴取で包み隠さず話していて、素直に罪を償うみたいよ...あまりにもあっさりとした性格で、担当刑事は拍子抜けしたそうよ」

「...彼とは確か電話で話したわ、口調で裏表のない人間だと分かった...一番まともかも...」

「...まあ彼は心配ないとして...城ノ内は問題があるみたいよ...彼女は今、入院していてね...」

城ノ内の件はミナコが話そうとした。

「...入院？例の筋力増強剤が原因？」

「ええ、彼女は過剰に劇薬を摂取して、とても正常な状態とは言えない...生きているのが不思議なくらいよ...念入りに検査してからじゃないと法廷には立てない...」

「...じゃあ城ノ内たちは、刑に服すことに対して反発してないのね...？」

「ええ...裁判はまだ先の話だけど、彼らの場合、いくら犯行を認めて更生する意思があったとしても刑は軽くならない.....特に城ノ内の場合、死刑は免れない...！」

「...今回のテロ事件は、二十年前に起きた都内地下鉄バイオテロ事件を彷彿とさせるものとなった...朝居が作った解毒剤は役に立ったけど、助からなかった人や後遺症がある人は大勢居る...被害者だけじゃなく、その関係者、被害者遺族にとって決して忘れられないことになる...心の傷が癒えるのにかなりの時間が掛かることでしょう...」

リカは眉間に皺を寄せて、ユカたちの言葉を正確に聞き取った。

「.....今後、こういったテロが起こる確率は？」

「...今回の犯行グループについては、宗教や大きな犯罪組織が関わっていないことが幸いしたわ...後を継ぐ者が居ることは考えにくいけど...」

「...ゼロとは言えないわね」

「...ええ、私たちの手で殲滅しないと...」

「...ガチャ」

「...！」

楽屋が重い空気に包まれる中、二人の来訪者によって、それは一変した。

「あれ？皆さん、お揃いで～」

楽屋に入室して来たのは、リカたちと同期であるヒロコとマギーであった。

「マギーとそこでばったりと会っちゃってさ～あんたたちは何話してたの？」

「...いや、特にこれといった話題がなくて...ただの世間話よ...」

ヒロコたちが会話に参加しようとするが、リカたちは、テロ関連のことを伏せてどうにか誤魔

化した。

「...それにしてもこうして同期が揃うのは久しぶりだね～」

「...そうだっけかな？確か去年の年末に会ったような...」

ユカ、ミナコ、マギーはリカとヒロコの漫才のような会話を楽しそうに見ていた。

「ついに明日が千秋楽か、お二人さんも卒業生になるわけだ...私たちの期もほとんど居なくなっちゃったよね...」

「...ほんと、うちの班は私を含めて二人しか居ないよ...時が経つのは早いね...」

五人の中で現役生はマギーだけとなり、彼女はしみじみと感じていた。

「...まあ皆、元気そうだから良かったよ...退団後も共演するかもしれないね～」

「リカはいつでも呑気ね、緊張とかしないの？」

「そりゃするよ、ただまだ実感が湧かないだけ...ヒロコもそうだと思うけど...」

「...うん、十年以上居たからね～辞めたら生活リズムが崩れそう～」

「.....二人は昔からマイペースだったけど、よく注目のスターになれたよね...感心するわ」

「...私たちもよく分かんないんだよね、演出家の先生によく怒られたことが最近のように感じられるし...」

「...まあ同期でトップスターが居ることは誇りに思わないとね～よく頑張ったよ」

「...ありがとう、わざわざお祝いに来てくれて...」

「明日も行きたいところだけど、仕事で行けなくてね...無事に千秋楽を迎えることを祈ってるわ」

同期五人は円陣を組んで、お互いの手を重ね合わせて同期の絆を深めた。

リカはその日、同期たちと楽しい時間を過ごした。どれくらいぶりだろうか、彼女は涙が出るほど心の底から笑っていた。

そして、ついに運命の日、肌寒さを感じるが天候には恵まれて千秋楽を迎えることが出来た。リカはその日、自ら高級外車を運転して颯爽とファンの前に現れた。リカは駆けつけたファンたちに軽く挨拶をして、アスカたちの先導で劇場へと入って行った。最後の公演となるわけだが、リカは特に意識せず、いつも通りに役をこなしていた。ファンもそれを望んでいると彼女は思っていた。あっという間に公演は終わり、リカは、卒業する劇団員として舞台に姿を現した。その時の姿は、歌劇団の男役のトレードマークである黒燕尾服であった。

リカは涙を見せず、観客席の前で「長年夢を与える仕事をしていましたが、夢を見ていたのは私の方かもしれません」と別れの挨拶を始めた。「私は十数年、様々な人間を演じてきました...英雄や悪役...時には妖怪や架空の生物を演じたことも...苦手分野もありましたが、今となってはいい思い出です...」とリカは述べたが、それには裏社会で生きるエージェント・リカも含まれているかもしれない。リカは悔いることなく、同じく退団するヒロコと共に舞台から姿を消した。

退団記者会見終了後、劇場前で退団者のためのパレードが行われた。強風で荒れる中、リカは紋付き袴姿で現れ、満面の笑みを浮かべて機嫌よくファンに手を振った。劇場前には八千人のファンが詰めかけ、彼女との別れを惜しんだ。こうしてまた一人、歌劇団から麗人が消えた。

それからまた数日が経ち、リカは東京に居た。その日、彼女は裏稼業の上司である新沼と本澤に呼ばれ、スーツを着用して警視庁に訪れていた。

警視庁 公安部部長室

部長室では、新沼と本澤がリカを待っていた。新沼は自分の椅子に座り、本澤は新沼の傍に立っている状態であった。

「...失礼します」

リカは一礼した後、新沼たちの前に立った。

「...よく来てくれたな、ここに来るのは久しぶりだろう？」

「ええ、滅多に来ることはないので...不思議な感じです」

「...もう来ることはないと思うからじっくり見といてくれ...」

「...はい」

リカは、本澤の発言に対して少々緊張している様子であった。

「もう本業を辞めたわけだが、どうだね、今の心境は？」

「...急に暇になって、生活リズムが崩れそうで慣れるのに時間が掛かりそうです...」

「...まあそうだろう、表の仕事は続けるつもりだろう？」

「ええ、特に何も決まっていますが...」

「じき、仕事の話が舞い込んでくるだろう、今は充電しておけばいい...」

「...はい」

「...以前に私か本澤が話したと思うが、裏稼業の方は続けてもらおう...問題ないね？」

「はい...承知しています...！」

新沼はリカに優しく言葉を投げ掛けて、彼女は迷いなく返事をした。

「...ただ、今の君に任せられる仕事はない...それに言うておくが、これからの我々との関係は上司と部下ではなく、顧客と請負人ということになる...我々より上の立場の人間と仕事することにもなる...フリーになれば環境がガラッと変わるわけだ...いずれ分かるだろう...」

「.....はい、私は別に何もしなくて大丈夫なんですかね？」

リカは、新沼の意味深な発言に少々狼狽している様子であった。

「...ああ、待てば自然と流れに乗る...心配しなくていい...」

リカは、新沼の言葉に安心して心音を整えた。

「.....ところで先日のテロ事件はご苦労であった...君のような優秀な人材が居たことを誇りに思う」

「...あの...お言葉ですが、私だけの力ではありません、仲間の助けがないと太刀打ち出来ないことでした...」

「...分かっているよ、今まで君たちにどれだけ助けられたか...大いに評価している...影の存在というのが惜しいくらいだ...はっきり言って警察組織の人間より君たちを信頼している...これからも力を貸してほしい...」

「...私なんかでよければ協力いたします」

「謙遜しなくていい...急に呼び出して悪かったね、実は君の顔が見たかっただけなんだ...許してくれ」

「いえ...！公安部部长に会えて光栄です」

「...昔は部下の顔を多く覚えられたものだが、変に出世して年を取ると、覚えられなくなる...お前ももうちょっと経つと同じ目に遭うぞ」

「はは...それは気を付けないといけませんな」

本澤は、新沼の軽い冗談を愛想笑いで返した。

「...よし、リカ君の元気な姿を拝めたことだし、お開きとするか」

「...え？もう失礼してよろしいのですか？」

リカは、新沼の発言できょとんとしていた。

「...ああ、特に質問などなければ下がっていいぞ」

「...はあ、それではこれで失礼します」

「...リカ、待ってくれ、下まで送ろう」

本澤は、退室しようとするリカを呼び止めて玄関まで送ろうとした。

新沼の方は、用を済ませて一息つこうとしたが、何故か彼は立ち上がり、応接室につながる扉を開けようとした。

室内を覗くと人影があり、新沼が来るのをずっと待っていた。

「...いいのかね？これで...」

「...ええ、顔を合わせる必要はありません、部長も人が悪い、早く言って下されば、また日を改めて訪ねようと思ったのに...」

応接室に居たのは以前、リカとパートナーを組んで密偵活動をしていた安藤ユウであった。彼は、リカが去るまで息を殺して応接室に潜んでいた。

「...まあいいじゃないか、元パートナーだということに照れくさいのか？それとも仲が悪いのか...？」

「...まあ後者が正解に近いですね、仲良くした覚えはありません、あくまで仕事での付き合い...彼女の本業は舞台に立つことですから...」

「...裏稼業で嫌な思いはたくさんしたと思うが、それに耐えて強くなっていったんだ...お前も頼りにしていたはずだ...」

「...だといいますが、お互いひねくれているもので、打ち解けることは叶いませんでした...僕は結構楽しめましたが...」

安藤は目を閉じて、リカと過ごした日々を懐かしんだ。

「彼女は上手くやっていけると思うか？」

「...さてどうでしょう...例のテロ事件に関わったことはいい経験になったと思います、こちらも勉強になりましたし...敵は何処にでも至る場所に潜んでいると分かりました...もうこの国もテロや紛争と無関係とは言えない...平和ボケが仇となる日も近い...」

さっきまで穏やかな表情を浮かべた安藤であったが、あることが頭によぎり険しい表情に変わった。

「...現状を見て来たんだな、どうだった？」

「...予想以上に酷いものでした、やはり日本は平和ですね...何としても今の状態を維持しな

いと...」

「...彼女も世界を相手にしなければいけない立場になる...公安で経験したことを活かせばいいが...」

「そうですね、コンビを解消したといっても住んでいる世界が同じなわけだから複雑ですね、何かの機会で会うかもしれない」

「...もし会ったらどうする気だ」

「あちらはどんな反応するか知りませんが、僕は気分良く対応しますよ.....ただ...」

「ただ...?」

安藤は、話の途中で一呼吸して間を置いた。

「...再会した時、世界に大きな異変が...日本は危機的状況に陥っているかもしれない...」

「.....!」

安藤は意味深な発言をして、新沼は返す言葉が見つからなかった。

「とにかく、彼女はもう僕と一緒に仕事する必要がない...巣立って行ったんですよ...そろそろ話題を変えませんか?スケジュールが詰まっています...」

「...ああ、そうだな、すまない...」

安藤たちは、リカのことを一切口に出さず、本題に入ろうとした。二人はしばらく応接室に閉じこもり、何やら深刻そうな話を始めようとしていた。内容は極秘で、彼らは外部に漏れないよう慎重であった。

一方、リカは本澤に玄関まで見送られ、別れの挨拶をしていた。

「...本当に今までご苦労だったな、ちゃんとさよならは言うつもりはないが、とりあえずお別れだ...」

「...はい、ありがとうございます、いつ会えるか分かりませんが、それまでお元気で...」

「ああ、お前も達者でな」

「はい、それでは」

リカは本澤に軽く手を振り、外に出ようとした。本澤はリカの背中を見ると、寂しげな表情を浮かべ、思わすリカに声を掛けようとした。

「...リカ」

「...何ですか？」

「.....何か問題があっても、別に一人で抱え込むことはない...お前にはちゃんと帰る場所がある...いつでも相談に乗るぞ」

「はい、ありがとうございます...」

リカが振り向いた瞬間、目に光るものがあった。彼女は、振り向きざまににこりと笑い、警視庁を後にした。その日は厳しい寒さで、リカは本澤と別れてからお気に入りのコートを羽織った。その後の彼女の行方を知る者は限られていた。

鳳の眼 鳳人炎舞 首都篇 完

鳳の眼 舞の章 首都篇

<http://p.booklog.jp/book/99518>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99518>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99518>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ